

501  
240



始



21056

501-240



文學士

成瀨無極著

近代獨逸文藝思潮

警醒社書店

大正  
10 12.13  
内交

## 序

憧憬の情と執着の意志と、深遠なる瞑想と透徹せる理智と  
獨逸國民の特性は其宗教、哲學、文藝の各方面に現はれてゐ  
る。その執れに向つても私の知識は狭く浅い。唯その情と意  
との纏れに深く心を牽かれ、そこに人間性の悩みを感ずる點  
に於て獨逸の文藝は私にこつて親みあるものと云へよう。そ  
れはまたロマンテイシズムとリアリズムとの波の起伏に外な  
らない。

わが心海に似たり、潮満ち潮引き、その底に美しき眞珠宿  
れり、ごハイネは歌つた。その光輝あるものを探りつゝ、そ

の潮に漂ふ身の幸福を分たうとして筆を執た私は徒らにそこばくの泡沫を齎らす訾をも甘んじて忍ばなければならぬ。獨逸文化の特色は其内面性に在る。その底を窮めるには強く長い息を要する。私の息は弱い。唯、その潮の苦味と眞珠の輝きの幾分を髣髴せしめるここが出来れば私の望は足りる。

本書に収めた論文十數篇は嘗て帝國文學、藝文、哲學研究三田文學、解放、大阪時事新報、大阪毎日新聞等に公けにしたものご、講義及講演の綱要ごから成つてゐる。系統的研究の發表は他日に俟たねばならない。唯、全體を通じて、ゲエテ以後の獨逸文藝思潮、即、浪漫主義、寫實主義、新浪漫主義

及最近の表現主義に至るまでの思潮の變遷と、其底を貫くロマンティズムごリアリズムごの消長を暗示するここが出来れば望外の喜である。

大正十年九月

東京大森の寓居にて

著者識

目次

浪漫思潮

- 漂泊の心……………一
- 若きヴェルテルの悩み……………二五
- 美しき魂の告白……………四九
- 四十歳の男……………六八
- 文藝に現はれたる宿命観……………八九

性の問題

- ヴェデキンドの詩と小説……………一〇四
- 女性我観……………一四二

最近獨逸文學

目次

一

ブーデルマンの新作劇……………一五八

最近獨逸文學の趨勢……………一七九

一 表現主義……………

二 歐羅巴の滅亡……………

三 表現主義の戯曲に就て……………

四 駄々主義……………

五 ハウプトマンの神秘主義……………

### 藝術及藝術家

藝術家の悩み……………二一九

藝術の民衆化……………二三五

クライスト評傳……………二五一

ヘツベルとイブセン……………三一二

ケルレル傳を讀む……………三五四

戯曲家としてのシュニツレル……………三八一

人及藝術家としてのワグネル……………五二四

### 漂泊の心



月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人也。船の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふるものは川々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取手につかず、股引の破をつゞり、笠の緒付かへて三里の灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅にうつる。(おくの細道)

漂泊の心の限り無い寂しさと楽しさとがこの文に泌み込んでゐる。かういふ心持は交通が開け、百般の文物が進んだ今日では容易に味はふことが出来なくなつた。「前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ」といふやうな經驗

も現代の人には縁が遠くなつて來た。殊に狭苦しい、餘りに性急にまた安價に開け過ぎた日本では六づかしくなつた。しかも漂泊の心は人心に根ざすことが深く、周圍の束縛と壓迫とが加はれば加はるだけ、ますます内に培はれてゆくのである。これを現代のロマンティック要求<sup>デマンド</sup>とでも名づけようか。一方から見れば凝固沈滞を強ひようとする社會的生活に反抗して自由を取り戻さうと努める人心流轉の慾望である。

流轉漂泊の心にも自ら二様の姿がある。ドン・ホワンのやうに花から花へと蜜を吸うて飛び移る享樂の態度と、芭蕉、西行等のやうにひたすら世を厭ひ人に背いて風月を伴とする隱遁の態度とがある。けれども要するに積極消極の差であつて、世俗の羈絆を絶ち、因襲の桎梏を脱れようとする欲求は一つである。そして弱い人間の常として離れようとして即し、安ぜんとしてまた動くところに同じ苦悶と同じ悲哀と而して一方に同じ歡樂とがあるのである。享樂のさ中<sup>なか</sup>に於て早くも愛着の羈絆<sup>きんぱん</sup>の束

縛を恐れて回避の念を動かし、身を益<sup>えき</sup>なきものになし果て、いざよふ月に憧<sup>あこ</sup>がれ出てながらも思慕懷郷の情を止めかねるところに漂泊の苦<sup>くるしみ</sup>さと甘<sup>あま</sup>さつとがある。

二

京へ來て早くも十年になるが私はまだ旅心が抜けない。一方には狭い單調な京の自然や人間に厭き果てながらも、一方には依然としてまだ逆旅の人のやうな感じが残つてゐる。三本木の月波樓の欄干に凭つて始めて草茫茫たる鴨の河原を眺め、靄然として空に聳える叡山の頂を仰いだときのあの印象がまだ生きてゐる。高瀬川の柳の影を行く曳舟の長閑<sup>のどか</sup>な有様や、面白い繪模様のこの小さな日傘<sup>ひがさ</sup>を翳して行く京の女の質素<sup>じっか</sup>でクラシカルな姿も、まだ旅人の眼で眺められる。そして一年に一度か二度、東へ歸つて、あの満々と水を湛へた隅田川のほとりを歩いたり、暗い上野の森を通り抜けてみたり、また明るい晴かな銀座通りを逍遙<sup>せうごう</sup>してみたりして、「郷土」といふ懐かしい安かな情を味はふのである。しかし、由來大都會の者には郷土が無い。殊

に中央集中の劇甚なる東京に於ては東京人の「郷土」といふものは殆ど無くなつてしまつた。在つても極く小さな一隅に押し狭められて所々に散在してゐる。東京はいつの間にか地方人の都會となつてしまつた。東京の人は母屋を取られて小さく借家住ひをしてゐる。あらゆる方面に於て主權は大抵地方人に握られてゐる。純粹の東京人は舞臺で痰阿を切つてみたり、高座で自嘲的な悲喜劇を演じたり、朝湯で茹<sup>だ</sup>章魚のやうに赤くなつて威張つてみたりしてゐる。私は東京へ歸つても他人の物になつた自分の祖先の家の周圍を低徊する失はれた子のやうな心地を禁じえない。それでも思ひがけない處に誠に偶然に昔の儘の小徑や横丁などが残つてゐるのを見ると少年の頃の記憶が油然として湧きあがつて、やつぱり東京だといふ氣がする。昨年の夏のある夕暮に舟で隅田川を溯つて小松島で上つて百花園の方へ一人辿つたとき、その少年の時度々遊びに來た庭園が荒廢しつゝもなほ昔の俤を残してゐるのを見た<sup>た</sup>ときにどんなに胸を躍らしたであらう。歸りの舟の中で二十年前の舊友の聲

をかけられ、その夫人に紹介<sup>ひきあ</sup>はせられたのは今思つても夢の心地がする。あの夕靄が立籠めて茫々と大海のやうに見えた川下の景色や、綾瀬の方へ曲る川上の暗い寂しい色もその時の思ひに適<sup>ふさ</sup>はしい情趣であつた。

かうして、私は西に居ても東へ歸つてみても不絶一様の憧憬と寂味とを感じてゐる。それは郷土を失つたものの味はふ情緒である。それが私にとつて實際幸福か不幸かは知らない。しかし私は往々その寂しい感情に溺れて秘かに樂んでゐる自分を見出す。

京にゐてもふ<sup>ふ</sup>とものに憑かれたやうに廢頽した古い町筋や、寂しい郊外などを彷徨することがあつた。西陣といふ土地は年々に荒び衰へてゆくやうである。陰氣な濁つた朱黒い色に塗つた家の列から淋しい機織<sup>はたをり</sup>の音が洩れて來る。細い陋苦<sup>むさくる</sup>しい通りを縦横に縫つて歩いて癡狂院の在るといふ船岡山の邊まで行つたこともある。顔れ落ちた城趾<sup>しろあと</sup>に草が茫々と茂り、赤土の底を見せて薄黒く淀んでゐる沼の處々



に葦や葎が簇り生へてゐて、時々姿は見えずに鳥の聲ばかり聞こえる、あのどこことな  
く水郷の氣分が溢れてゐる淀の邊は、電車の窓から眺めたばかりでも旅愁といふや  
うな心を起させるのに十分である。漂泊の詩人レナウの吟じた「葦の歌」の情景もそ  
ぞろに思ひ浮べられる。波も立たぬ池に宿る優しい月の光と、丘の上に逍遙ふ牡鹿  
と、高い葦の底の方で夢みるやうに時々動く小鳥と――

嘆きつゝわが眼は俯す、

魂の底に浮ぶ汝を戀ふる、

甘きおもひ、

夜の黙禱のごとく。

それは薄倅の詩人が胸に秘めた戀慕の情を歌つたものであるが、戀を知らない身  
でも、茫々として唯敗荷の影ばかり宿す巨椋池の邊を宇治の方へと辿つてみたり、  
嵯峨野あたりの古池の縁を通つて蒼い水の色を睨と眺めながら御室の方へ夕暮の道

を急ぐときなどには同じ都の中にありながら知らぬ他國を漂泊ふ人のやうな氣がす  
る。廣く旅をして暮らす人から見ればあまり小さな感情を弄んで喜んでゐるやうで  
滑稽にも思はれやうが、またさういふ自由に漂泊をすることの出来る人々にはもう  
味へなくなつたやうな、思慕から來る感情の清フレスシユネヌ新が無いとは云へぬ。それは、老  
エクダルが裏の小屋に森林を造つて鳩や兎を射撃して自ら慰める感情上の遊戯に類  
してゐるかも知れないが、假初の散策や遠足でも、そこに利害や目的の觀念が加は  
らず、たゞ行くがために行くのは既に漂泊の心の萌芽と見ることが出来る。船唄  
や馬子唄や、その他様々の民謠に心を誘はれ、遍路の唱へる御詠歌や、虛無僧の吹く  
尺八の音に心を唆られるのもこの心の作用だと云へる。近代音樂に於て民謠の要素  
が著しいのも一方に郷土的情操の現はれてあると同時に、他國の風俗人情に憧がれ  
る異國趣味の要求かと思はれる。そして若し深く味はふことが出来たら、音樂ほど  
漂泊の心を促し、またその遺瀨ない思ひを充たし得るものは無からう。

獨逸人にはロマンティックの要素が多分に在ると云はれてゐる漂泊の心の如きもその一つの現はれてあらう。まだ鐵道の開けない時分には獨逸の職人は皆所謂「旅杖」を携へて徒歩で諸國を修業して廻つたものである。節瘤のある杖を持ち、豫備の靴などを附けた旅囊を背負つて楽しい「遍歴の歌」を歌ひながら野を越え山を越えて諸處の工匠の門を叩き、幾年かの修業を積んで、所謂「名作」を出して始めて工匠權を獲得することが出来た。この間に幾多の辛酸を嘗め、多くの人々に接觸して、技術の鍛錬ばかりで無く、人間學の方面に深い知識を得て腕と人物の上で工匠の貫目を修得するのである。それまでの徒弟の遍歴時代には汗と涙と戀と詩とが自ら織り込まれてゐる。工匠詩といふ特殊の詩風までそこから生れた。また工匠の美しい娘を中心として若い徒弟達の間には複雑な感情の鏈れが出来て、小さな優しい胸が人知れぬ苦勞に惱むといふやうな艶めかしい挿話もあつたであらう。

美術の都ニュルンベルクは特にさういふ詩や戀の淵藪であつたやうに見える。ホツフマンの「マイステル・マルチンと其徒弟」を讀む者はあの頃の獨逸の職人氣質といふものに興味を持ち、その遍歴的生活に潜むロマンティックの氣分に一種の憧憬を感じずるであらう。ケルレルの作品にもさういふ味の物が幾種かある。

「タウゲニヒツ」の一編で夙くから我國に知られてゐる浪漫派の詩人アイヒェンドルフの詩には漂泊の楽しい明るい方面を歌つたものが多い。「楽しい旅人」といふ詩には「神が眞の恩寵を示さうとするとき、神はその人を廣い世界へ送る。」と云ひ、家庭に囚はれて搖籠と心勞と重荷とパンのための困苦とに精力を消磨する人を感み、小川や雲雀と聲を合せて朗らかに歌ふ楽しさを説いてゐる。この外「憧憬」、「旅の歌」、「告別」など皆漂泊の楽しさを歌つた詩である。

ハイネにも多く漂泊の氣分が見出されるが、そこには憂鬱な感傷的要素が勝つて居る。「さらばよ、さらば！青海原に、故郷の影は薄れつ、夜風は太息し、舟人の權

は重く、もの怖して鷗は飛び去りぬ！」といふ「チャイルド・ハロルド」の譯をはじめ、有名な「ロオレライ」でも、「歌の翼に乗せて、戀人よ、君を運ばむ、ガンダスの河畔へ」でも、「美はしき海人少女よ」でも、「異郷にて」「漁夫の家近くにわれ等は座せり」でも皆同様の情調が漂つてゐる。最後の詩では、人々が漁夫の家の前に座つて海の方を眺めてゐると、夕靄が漸々立ち籠めて来る。燈臺には火が點される。そして遠い沖の方に一隻の船の姿が幽かに認められる。人々は暴風雨や難波船の噂をしたり水と空と恐怖と歡喜との間に漂ふ舟乗の生活や、遠い異國の海岸や、そこに住む不思議な人間や奇異な風俗などの事を語り合つてゐる。ガンダス河やラツブランドの話も出る。少女達は眞面目に傾聴してゐる。そのうち誰も口を利かなくなつた。いつかどつぷり暮れて、船の姿はもう見えなくなつて了つた。この詩は異國情調と氣分の描寫に於てロマンティックの詩風の特徴をよく現はしてゐるものと思ふが、ハイネの漂泊の心は前にも云ふ通りアイヒェンドルフ等のそれに比べると

著しく陰鬱なものである。それは故國を追はれたもの、眺める自然と人生であつて、漂泊そのものを樂み味はふといふよりも、抑へ難い悲痛と怨恨とを懷いて異郷を放浪し、力めて感傷的氣分に浸つて自ら慰めようとするものやうに見える。これには詩人の生涯からの無意識的推斷が加はつてゐるかも知れないが、ともかく分裂した心で自然や人生を眺めてゐることは確かである。

しかもハイネの漂泊の寂しさと痛ましさとは一種の甘酸ばいやうな感傷の分子が多分に入つてゐる。眞の厭世又は隠遁から生れた寂味は無い。同じ漂泊の詩人でもヘルデルリン(Holderlin)や前に擧げたレナウには身に喰ひ入るやうな寂味がある。この兩詩人は共に不幸な戀に胸を傷けて漂泊の旅に上り終に狂人となつて暗い餘生を送つたのである。ヘルデルリンは人妻を戀ひてその苦しさは諸國を放浪し、家人にも消息を絶つてゐたが、ある夏の日に瘦せ衰へて、顔色蒼褪め、落ち窪んだ眼を充らせた乞食となつて歸つて來たと云ふ。希臘の美と思想とを慕ひ求めて、そ

の典型をある人妻に發見したことが彼の悲運なのであつた。同じ宿命はレナウの身にも懸つてゐた。彼も蠱惑的美を有つた人妻を熱愛して煩悶の極終に發狂したのである。レナウは幼時から荒涼たる自然の中に育まれ、流浪の民なるジブシイの群に接觸し、その不思議な音樂に耳を傾けてゐたのであるから、彼が後年亞米利加まで旅したのも、夙くから種を播かれた漂泊の心の結果であらう。彼には「葦の歌」の外に「三人のチゴイネル」、「三人のインディアーネル」、「波蘭士の亡命者」、「驛馬車の喇叭」、「久遠の猶太人アハスヴェル」等の名高い詩がある。「久遠の猶太人」については尙後に述べるつもりであるが、「ポストホルン」の方は、夜更けに月のみ呀え渡り、わづかに小川の囁きが聞きとれるやうな静けさを破つて遠くから幽かに驛馬車の喇叭の音が響いて来る。悲しい漂泊のメロジイである。人間の別離の餘りに速かなることを思つてそゞろに胸が塞がるといふ心地を歌つたもので、同じポストホルンの音でもアイヒェンドルフにあつては楽しい旅情を唆つてゐるが、レナウのは極めて寂

しく響いてゐる。この他、「影の無い人」を書いたシャミツソオの如きも世界的旅行をした人で、ブラジリエンからチリイを経て南洋へ、それからカムチャツカからベエリング海峡を通つて北氷洋へ、更に世界一週を企て、太平洋から印度洋を通つて喜望峯に達して、當時まだ奈翁の生存してゐたセント・ヘレナを過つて歐羅巴へ歸つて來たと云ふ。かの有名な詩篇「Salas y Gomez」はこの大旅行中の獲物であつた。そこには絶海の孤島に漂流した男の悲惨な運命が深刻な筆で描かれてゐる。

漂泊の心を歌つた詩人はこの外に澤山ある、といふよりも詩人は皆漂泊の心を持つてゐると云つた方が適當かも知れない。天才は元來漂泊を愛すると云はれてゐる。また放浪性は同時に狂人の素質にもなつてゐる。ルソオ、クライストなどの生活を見ても、始終何物かに追はれるやうな不安の影が付き纏つてゐる。二人とも追躡狂の徴候が明かであつた。これ等の人は何處へ行つても安住をえない。人間から自然へ、自然からまた人間へと絶えず彷徨し、絶えず漂泊してゐる。彼等は誠に「久遠

の猶太人」の子である。「久遠デール、エー非ゲ、ユースの猶太人」は基督に休息を與へなかつた罰として永久に漂泊すべく呪はれた不幸な猶太人だと傳へられてゐる。傳説に従へば今だに何處ぞを彷徨してゐる筈であるが、少くともその子孫は現代に於ても絶えない。露西亞人などに殊に多いやうである。それを述べる前に、やはりこの猶太人の事を詩に作りかけたこともあるゲエテの漂泊的傾向に就て一言しておかうと思ふ。

## 四

ゲエテは常に「自然フルフト、イン、ダイ、ナツウルへの避難」をしてゐたやうに見える。世の種々の煩累ワツラムから逃れて自然の懷ろに隠れ、そこで再び新しい力を得た。これは「ヴェルテル」から「ファウスト」に至るまで殆ど凡ての作を通じて認められる。實生活に於ても、一つは身體の鍛錬の目的からでもあつたが、絶えず騎行や、遠足や、大旅行をしてゐた。従つて「遍歴の歌」が數多くあり、またその中に勝れたものが少くない。「旅人の嵐の歌」、「遍歴の歌」、「移住者の歌」、「旅人の夜の歌」、「イルメナウ」などその一例である。殊に

「旅人の夜の歌」兩篇は絶品と云つてよからう。「すべての頂ヤツカに安息あり、凡ての梢には風もそよがず、森の小鳥はみな黙せり、しばし待て、麴カクも憩はむに。」といふ詩には芭蕉や西行などの心持と共通の靜寂の氣分が流れてゐる。「—甘き平和よ、わが胸に來れ」と結んだ詩にも同じ寂味と自然の中へ融合しようとする希望ねがひが現はれてゐる。また森の香りが満ちてゐるやうな「イルメナウ」の一篇にも渺茫ミョウマウとして捕捉しがたい人生の佛が描かれてゐるやうに思はれる。この「自然への避難」は俗事の煩累から逃れて安息を求めるといふ意味では漂泊の心に反對してゐるやうであるが、私の云ふ漂泊の心は人爲の拘束から脱れて自由な世界に放浪する意味であるから、この「自然と融合の欲求」は漂泊の心の現はれと見られるのである。ボーデの傳へるところに依れば、一八三一年、八十二歳の高齡に達したゲエテは、最後にもう一度ワンマールさすらふ人 (Wanderer) となつて早朝にギッケルハアンの頂まで登り、かの獵小舎の中へ入つた。そこの南の壁には一七八〇年の九月六日に彼が三十歳餘りの

青年として書きつけたかの「旅人の夜の歌」が残つてゐた。老ゲエテはそれを読み下すとはらはらと落涙して、極めて静かに濃褐色の上衣の隠袋から雪白の手巾を取り出して涙を拭ひ、柔かなうら悲しい調子で、「さうだ、しばし待て、聽て汝も憩はむに。」と呟いたと云ふ。

ゲエテほど眞に漂泊を愛し、また漂泊の心を解してゐた人は尠なからう、彼はハイネやヘルデルリンやレナウ等のやうに分裂した心で自然を眺めてはゐない。たとひ始めはさういふ感傷的な心や絶望的の氣分が動いてゐても、一度自然の懐ろに入ると丁度慈母の乳房に縋る稚兒わがこのやうに凡ての悲みを忘れてしまふ。自然と同化して、その永劫の生命を頌ち、その進化に與るものゝやうに見える。アイヒェンドルフ等も亦よく自然と呼吸を共にして其生命へ滲入する力を有つてゐるやうであるが、只管その明るい快適な方面に同感して、小鳥のやうに、春風のやうに通過し、未だ自然の奥秘な生命に觸れないやうに思はれる。ゲエテに至つては嚴肅な實生活を背

*Wahr ist das Geyfeln  
 Ist die Luft,  
 Die wirft die  
 Kamm einen Hauf;  
 In Wolken pflegen  
 Im Thal.* *Wahr ist, bald wirft die Luft.*

景にして努力精進の結果自然の底に潜む静寂にして、しかも絶えず流動すべし或物に觸れえたものゝやうに見える。そしてゲエテが隱遁者流と異なる點は自然を靜的にばかり眺めずに、また動的に眺め、否、むしろその流動する生命の中へ没入することが出来たところに在ると思ふ。

ゲエテの漂泊の心を知らうとするには彼の著作の外、書簡、日記なども亦好資料である。「瑞西書簡第二輯」に収められた、十一月某日瑞西の山中で、ある敬虔な婦人から聖アレキシスの悲痛な漂泊の物語を聞いて殆ど落涙を止めえなかつたといふ項の如きは最も漂泊者としてのゲエテに同感させられる。

以上は専ら「自然への避難」といふ意味で漂泊の心を説いたのであるが、この心は必ずしも自然を對境とするものではない。人間社會の渦中に在つても亦漂泊放浪の形を見出すことが出来る。ゲエテの場合を考へると、よく道學者流の非難の中心となつてゐる彼のドン・ホワンの傾向——一つの戀から他の戀へと移り行く心、舊い戀

*Flucht in die Natur*

の名残を懐かしみ、悲む心の傍から新らしい戀の喜びが芽を吹くといふやうな気分、あすこにゲエテの漂泊の心を見ることが出来るやうに思ふ。それが性格上の缺點であるか否やは別問題として、この落着がない不安な心は殆ど無意識的に作用して彼を一人の戀人から他の戀人へと驅つたものゝやうに見える。勿論そこには自己の天分と周囲の束縛といふやうな問題に對する反省もあつたらうが、それは寧ろかの漂泊の心が動き出した後から起るのではなからうか。即、茲にはゲエテの所謂「魔力的」のものが働いてゐるやうに思はれる。これは若いゲエテの懺悔劇と云はれる「ステラ」、「クラフィーホ」などを讀んでもわかる。「ステラ」の改竄を經ない前のテキストに依ると三幕目のフェルナンドと管理人との問答から主人公が妻のツエチリイを棄て、家出をした心持が讀める。そしてそれは取りも直さずゲエテが最愛のフリーデリケから離れた消息を語るものである。即、幸福な二三年の後に何とも知れない惱ましい心が主人公を襲ふ。「虫が喰ふ」(Wurmen)といふ文字か用ゐてある。

何となく落付かない。凡てが心に満たない。周囲が狭苦しい。捉へられてゐるやうな氣持がする。もつと廣いところへ出たい。自由の世界が戀しい。——かういふ氣分の後に自己の伸びる可き天分の自覺が漸々明らかになつて来る。ゲエテの「ゾイヘルム・マイステルの遍歴時代」の中に編み込まれた御伽話に「新らしきメルジイネ」といふのがある。一寸法師の姫に戀した男が自分も一寸法師になつて幸福な日を送つてゐるが、昔の大きかつた「自分」を忘れかね、また自分の理想としてゐた「巨人」の姿を夢にみて終に我慢が出来なくなり、魔法の指環を切つて一寸法師の國から逃れ出て、舊の大きい自分に歸るといふ筋である。ゲエテは之を既にフリーデリケに話してきかせたといふが、事實としても、果して後に書かれたやうな形で、ある一定の目的を以て語られたか疑はしい。少くとも私は可憐なる戀人を一寸法師の姫に譬へ「巨人」を理想とする自分と並べて及ばぬ戀と諦らめさせようといふやうな残酷な事をゲエテはしなかつたらうと思ふ。やはり、ゲエテの所謂移り氣は天才の

感ずる一種の本能で、無意識的要素が餘程多かつたもののやうに考へられる。それに拘らずゲエテは非常に自分を責めて、血を吐くやうな懺悔の作品を公けにしてゐる。

要するに彼が戀から戀へと移つたのも、また戀の煩ひから逃れようとして、又は戀の創痕を癒さうとして「自然」に赴いたのも、そしてまた不思議な衝動で「自然」から再び戀愛の世界へ歸つて來たのも皆漂泊の心の作用と見られる。そして彼が一面「ドン・ホワン」たると同時に他面に於て常に「巡禮者」であつたことが、彼を片々たる「漂泊者」の群から懸絶せしめる所以だと思ふ。即、彼に於ては積極と消極との意味に於ける漂泊の心が相表裏してゐて、その間に性格が形づくられ、個性が深められて行つたやうに見える。

ゲエテの詩歌や小説戯曲などに著しいこの漂泊的精神は近代作家の作品にも求めることが出来る。例へばハウプトマンの「アトランテイス」や「ガブリエル・シルリグの出奔」などにも現はれてゐる。要するに抒情的氣分の作家には殆ど共通の傾

向と云つてよからう。唯、程度の問題である。最後に私は「漂泊の民」とも稱すべき露西亞人について一言を附け加へておきたい。

## 五

ドストエウスキイの「死人の家」の中に夏が近づくと云ひしれぬ哀愁が囚人の心を襲ふといふやうな事があつた。最初の雲雀と共に露西亞の放浪生活が始まるのである。悲しい五月！哀れな囚人は人の胸は、自由の憧がれて張り裂けさうになるといふ。誠にあの茫漠たる西比利亞の平野を控へ、自然人の要素を多分に備へた露西亞人に漂泊の心が強く、放浪癖の附き纏つてゐるのは當然と云はねばならない。

私は杜翁を漂泊的傾向の人と云ふのに躊躇する。餘りに意志が強固で、あまりに熱烈な革命者であり、あまりに執着心が強かつたからである。しかも晩年の作なる「生ける屍」や「闇を照らす光」などを讀み、更にその寂しい最後を想ふと、この人も亦漂泊の心が潜んでゐたことを認めざるを得ない。實を云ふと私は、あの種々非



難のあつた藝術座の「生ける屍」を観て主人公の漂泊の姿や、また彼の周圍に在るジブシイの群(假令それはカリカトゥルではあつたにせよ)の生活に一種蠱惑的の魅力を感じてこの小篇を草するやうになつたのである。あゝして妻子を棄て、家出をするといふのは何といふ悲しい人の心であらう。さう考へた私はふと「春」の主人公が頭を丸めて放浪の人となり、墓に手向けた水を飲んだりしたことを思ひ浮べた。そしてまた「生ける屍」の主人公の家出の動機は單に結婚の悲劇からでは無く、一般の社會的因襲、虚偽な形式的生活に對する憤懣に在ることを思つた。それは然し藝術座がカットし去つた「法廷の場」に於て暗示せられてゐた。「闇を照らす光」になるとそれが一層強烈に出てゐる。それにしても「コサツクス」に現はれた漂泊の心とこの最後の戯曲に示されたそれとは何といふ相違であらう。かしこには新生の若々しい喜びが溢れてゐるが、茲には厭世隱遁の寂しい心が漂つてゐる。

露西亞の漂泊的作家と云へばゴルキイを挙げないわけにはいくまい。私は彼の

「放浪者」<sup>ゾラ</sup>といふ小説を讀んで、露西亞に特有な放浪者、寧ろ破落戸、無頼漢といふやうな者の心理を察することが出來た。物語の主人公は放浪者中の所謂「インテリгент」の型で極端な自暴自棄的生活を送つてゐる危険な虚無主義者である。彼は「久遠の猶太人」の子孫だと稱してゐる。私は彼の言葉を借りてこの小篇を結ばうと思ふ。そしてかの「ジブシイ」又は「チゴイネル」と稱せられる世界的放浪人種について詳しい事が知りたいと云ふ慾望を附け加へておく。

即、ゴルキイの「放浪者」はかう語つてゐる――

「つまり俺にはこの世間が狭過ぎるんだ。そして俺が大き過ぎる!と云つたら少し違ふかも知れないね。まあいゝや、とにかくこの世には久遠の猶太人を先祖にしてゐるやうな人種がゐるのだ。廣い世の中で何處にも屍が落ち着かず、何處にも靜つとして居られないといふ變つた奴らなんだ。……つまり胸<sup>むね</sup>ん中<sup>なか</sup>に何か新奇な物が欲しいといふ心が燃えてゐるんだね……かういふ質<sup>たち</sup>の人間で卑小<sup>けいせう</sup>なのはどんな筒袴<sup>つぽん</sup>をこ

しらへてみても氣に入らないで鬱ぎ込んでゐるといふ奴さ。少し偉いものになると何を持つていつても満足しない。金でも、女でも、名譽でも駄目だ……かういふ人間は誰にも好かれない——刺があつて傲慢だ。世間の奴等は高低まあ——小錢のやうなものだ——出来た年號が違ふだけの話で價値は皆同じさ。こつちは少し磨滅してゐて——これは少し新らしいと云ふ位のもので、地金は皆同じだ。そして退屈する程よく似てゐる。ところが俺はそんな一文錢ぢや無い——まあ負けといて銀貨位のところかな……それつ切りさ……」

## 若きヴェルテルの悩み

—

今でもさうらしいがその頃の高等學校の生徒は誰でも大概一度は「ヴェルテル」を通讀したものである。名は忘れたがある文士がその隨筆の中に伊豆の海邊で「ヴェルテル」を繙いて熱い涙を流したといふやうな事を書いた。さういふ文がまた青年の心に強い刺戟を與へた。近頃十數年前に愛讀して到る處にアンダーラインしたレクラム版の「ヴェルテル」を取り出してみると當時の事がさまざまに思ひ出された。一冊のレクラムも、そこに假初に引いた一劃の鉛筆の痕も自分の生長のプロセスを語ると思へば貴い。最早單に「白きが上の黒きもの」では無く、そこには自分の若い生命が潜んでゐるのである。

「フアウスト」のやうな書物は幾度も幾度も繰返へして讀むべきもので、こちらの思想感情の大小深淺に依て丁度巨鐘が撞く者の力に應じて無數の異つた響きを發するやうに、無限の意義を生じて來るといふことは一般に認められた事實であるが、「ヴェルテル」のやうに青年の心理を描いたものが特に青年に愛讀せられるのは自然である。けれどもまた青年ばかりが讀むべき書だとするのは誤まつてゐる。圓熟した思想感情の前には存立し得ないやうな幼稚な作とは全然選を異にしてゐる。永く青年の心を失はぬ人、自己の青春を振り返つて見ようとする人、現在の青年の心を理解しようと思ふ人、一般に物心の生長、發達、成熟の痕に思を潜めて人生の歸趣を洞察しようとする人は必ず屢々繙讀すべき書物である。ナポレオンは陣中へ之を携へて再三精讀したといふ。ゲーテ自身も折々之を繙いて自己の進化の道筋を眺めたのである。彼は廣く自然界を觀察し、植物の變形の痕を討ねて宇宙進化の大理法を感得した人である。獨り自己の精神の歴史の研究を忽にする筈はない。さて私

が今「ヴェルテル」を繙くのは果してどの意味に於てゝあらうか。私自身あまりこの點は考へてゐない。けれども私は青年の心を永く失ふまいとするものであり、また平常青年に接してゐるので、その心を理解しようとするものであり、そしてまた年齢の上から云つて今や青年期から漸々離れようとする私なのであるから、少くともそこに回顧追憶の情の交つて來ることは否認することが出來ないであらう。

## 二

高等學校時代にアンダーラインした處を見ると、それは主にヴェルテルが悲しい戀に悩み悶える處で、感傷的の文字に富んだ個所である。例へば九月十日の手紙には半分以上も朱線が引いてある。時は秋である。處は思ひ出の庭園である。段丘テラツセの上の高い栗カクタニエン樹の下に立つて落日に寂しい思ひを寄せてゐるといつか日は全く没して月が上つて來る。そこへロツテがアルベルトと一緒に近づいて來る。冴えた月の光に魅せられたやうになつてしばらく皆無言である。やゝあつてロツテが云ふには、

月の光を浴びて逍遙するといつも死んだ人のことを思ひ出す、それから死とか未来とかを考へる。來世といふものは在るには違ひないが、然し吾々は再會するだらうか、相互に認め合ふだらうか、ヴェルテルの考へがきいたいといふのである。永久にロツテから離れようと決心して最後の告別に來たヴェルテルはロツテに手を差し出しながら、「會ひますとも、この世でもあの世でも！」と辛うじて云ふが、胸が追つて後の言葉が出ない。眼は涙で一杯になる。それからロツテが亡き母の追懷を語る。最後に「では左様なら、またお目にかゝりませう。」とヴェルテルが云ふのをロツテが引き取つて「明日ね。」と戯談交りに答へる。この言葉がヴェルテルの心を深く動かす。二人が並木道を月に照らされながら出て行くのを見送つて大地に伏して男泣きに泣く。——こゝは幾度も繰返へして讀んだものである。黙つて讀んではおられなくなつて聲を出して讀んだ。ある時はその聲が曇つて慄へたこともある。それから二人して「オシアン」を讀んでゐるうちに感情を制し切れなくなつて最初のそ

して最後の抱擁をするあたり、「吾々三人の内一人は去らなければならぬ。その一人に私はならうと思ふ。」といふ最後の手紙、それからもつと甘い感情を語つてゐるところではロツテの唇に接吻し、ロツテの口から養つて貰ふ金絲雀カナリヤを見て思はず顔を背反けるといふ條などに線が引いてある。

今の私の興味の中心はさういふ感傷的の方面よりも寧ろ一般にあの頃の青年の心に起つた動搖と新思想の醗酵とにある。一言すればシュツルム・ウント・ドラング期の反映として見るときにヴェルテルは一層深い意義を有つて來るのである。

この見地からすると先づ氣が付くのは「自然に歸れ」といふルソーの思想が全篇に瀾漫してゐることである。常識主義、形式主義に反抗して赤裸の人間性に立脚しようといふ欲求と努力が到處に現はれてゐる。

第一に「自然の愛」が著しく描かれてゐる。これはゲエテの一大特色であつて、一方には幾多の不朽な抒情詩となり、一方には價值ある自然科学的研究となつて傳は

つてゐる。萬象の中に汎く神を見るといふ自然即神靈の宗教觀も茲に根ざしてゐるのである。自然の愛は抒情詩の外に「ファウスト」第一卷などにも屢々現はれてゐて煩はしい世の營みを逃れて自然の懷に抱かれ、自然と融合したいといふ願ひはどんな境遇の下にも詩人の心から離れなかつたものと見える。彼の旅行癖も登山熱もこゝから來てゐる。ヴェルテルの第一信の冒頭にも、離れ難く思つてゐた友から別れて來てしかもかく心樂むとは何といふ人の心であらうと自ら怪んでゐる。五月十日の條には、春の野や森や谷を眺めてゐると不思議な快樂が胸に充ち溢れて自分の藝術はそのために壓倒せられてしまふ、今のところ一線も引けないが、然もこの瞬間ほど偉大な畫家であつたことは曾て無いと書き、またこの心に充ちて温かく生きてゐるものをさながら紙上に寫し出すことが出來たらどんなに嬉しからう、それは汝の心の鏡であり、汝の心はまた神の鏡であるやうに云々と自然を讚美してゐる。大空は戀人の姿のやうに我が魂の中にさながら休むとも書いてゐる。自然は實にヴェ

ルテルの戀人であつた。彼は自然のやうにロツテを愛し、ロツテを愛するやうに自然を愛した。遺書にもかういふ一節がある――

「この眼を開くもさらばこれを限りなり。もはや日の光を見ることあるべからず、灰色の曇り日永く蔽ひ包まん。いて、自然も愁ひ嘆け！汝が子、汝が友、汝が戀人は今その最後に近づくなり。」

ゲエテは單に自然を眺め、味ひ、樂んだ人では無く、自然と共に、自然の中に生きて呼吸した人である。自然と融合して一體となつた人である。

自然の愛は一方に屢々人間社會の回避を豫想するので、消極的態度として之を排斥する人々もあるが、然しゲエテの如き人にとつては自然はその無限の創造力の源泉であり、身心の最も滋味に富んだ營養であつた。幼年の時に人は自然と一體になつてゐる。少年の時にも之と馴れ親んでゐる。青年期になつて漸く客觀的に之を觀察するやうになる。そして意識的に自然から深い影響を受けて入れる。そして屢々

その美に憧がれ、酔ひ耽つて之を讚美し渴仰するやうになる。自然の中に神性を認めて跪拜するやうになるのは青年期に於ける感情生活の最も著しい特色の一つである。自然に對する感情の清フレッシュネス新を永く失はないのは嬰兒の心をまだこを永く失はないことを意味する。この世界は果して「大人」ばかりの世界であらうか。文明とは自然の征服を意味するのであらうか。シルレルはこの關係を長詩「散歩」の中に歌つてゐる。

## 三

自然の愛に關聯して著しく現はれてゐるのは小兒に對する愛情である。天真流露の小兒の動作は常にヴェルテルの心を牽き、小兒はまた直覺的にその愛を感じて彼を慕ひ彼から離れない。ヴェルテルは自らかう語つてゐる――

「この地上で私の心に一番近いものは小兒だ。彼等の顔を眺め、かういふ微小なものの中に他日必要な凡ての長處、凡ての力が芽を出してゐるのを認め、子供らしい片意地の中に未來の堅固な性格を見、我儘の中に世の危険をさり氣無く切り抜

ける快活な輕捷な氣分を見ると、しかもそれ等が凡て少しも損はれずに完全無缺に存在するのを見ると、いつも、私は人間の師と仰ぐべき方の言葉を繰返へす、それは「爾曹嬰兒の若くならずば」といふ貴い言葉である。」

瀕死のヴェルテルの傍で最も烈しく泣き悲んだのは平生馴れ親んでゐたロッテの小さい弟達である。彼等はヴェルテルの手や口に接吻し中にも彼が最も愛してゐた一番上の男の兒はいつまでも彼の唇から離れようとせず、彼が絶息した後で人々が無理に引き離した。子供達は父と一緒にこの不幸な青年の深夜の密葬に加はつた。小兒に對する愛がヴェルテルの性格の一面を語つてゐるやうにイブセンの描いたノラが自分の子供達と嬉遊する無邪氣な態度は彼女の性格をよく現はしてゐる。

自然を愛するものが自然美の最も重大な要素なる樹木を愛するは怪むに足りない。樹木の生死――萌芽、生長、開花、結實等の變化、花から青葉になる迄の微妙な移り變り、柔い新緑の色が漸々濃く強い色に變はつてゆき、やがて露霜に飽いて

赤に黄に茶に二度の春を飾るかと思えるのも時の間、やうく枯れ萎み、秋風にかさこそと散り失せて、裸の枝は木枯に身を震はし、冷たい雪を戴いて縮みかじけてしまふが、その雪の解ける時分にはいつしか微かな微かな緑の芽が慎ましげに其處此處から小さい頭を出してゐる。かういふ黙々の中に行はれる自然の推移の痕に誰か心を驚かさぬ者があらう。自然を愛する者は深夜樹木の呼吸を聞くやうにすら感じ、その葉擦れの音に自然の囁きを聴かうとさへするのであらう。ヴェルテルの戀にとつて意味深い幾株かの胡桃の樹があつた。教會の開祖の植ゑたものと傳へられてゐた。その涼しい蔭で彼と牧師とロッテと三人して語つたこともある。この由緒ある老木が心無い人々の手に懸つて切り倒されたとき彼は憤懣の餘り狂するばかりになつた。「最初の刃を加へた犬奴を殺してやりたい。」といふやうな彼に似合はない思ひ切つた劇しい呪ひの言葉を吐いてゐる。そして同時に、學者振つて基督教の倫理的、批評的革新を企てつゝあると云ふ冷酷な牧師夫人を嘗つてゐる。

熱烈で高潔な情操を尙ぶ彼が金錢や名譽を輕視するのも容易に了解せられる。彼は他人のために、物質のために、自分の好まない求めない事に盡瘁する人間を愚人と呼んでゐる。

## 四

「自然に歸れ」といふ叫びはやがてまた自由平等を求める聲である。青年は自己を中心とし權威としよう欲して他の一切の權威を無視し又は進て之を倒さうとする傾向がある。革命的精神が横溢してゐる。「新らしき酒を舊き革囊に盛る者はあらず。」といふのが彼等の標語である。人爲的の形式を打破して新らしい眞精神を發揮しようとして逸り、餘り躁急に過ぎて半途で斃れることも稀では無い。ヴェルテルも亦かういふ「天才時代」の犠牲であつた。ヴェルテルを書いたゲーテはしかしこの危険な奔流を通り抜けて廣い藝術の大洋に浮び出たのである。彼の若い友の幾人かは中

途で力盡きて難破した。さういふ人々は恰も自分の屍で天才ゲエテのために道を造つてやつたやうな観がある。

實生活に於ても藝術に於ても因襲的の形式を打破しようといふのがその頃の青年の目的であつた。階級や煩瑣な規則、習慣、禮法等に對する反感は「ヴェルテル」の中に屢々現はれてゐる。

「身分のある輩は平民に近づくと威嚴を損ずるとでも思ふのか冷かに距離を保つ。中にはまた悪い道化者があつてわざと平民的に出て却てその傲慢を一層甚だしく憐れな人々に感ぜしめる……成程吾々は平等では無くまた平等であり得ないことは自分もよく知つてゐる。然し尊敬を維持するために所謂賤民から遠ざかる必要があると思ふ人間は負けるのを恐れて敵から隠れる臆病者と同様に非難を免かれなう。」

「規則の利益を喋々するのは市民生活を讃めるのと同様の立場から出るのだ。」

規則を遵奉する者は決してつまらぬものや拙いものは作らないだらう、法律と善良な習慣とを守る者が決して始末にゆかぬ隣人とならず、また珍らしい悪漢になりえないやうに。その代りまた凡ての規則はたとひ人が何と云はうとも自然の感情とその眞の表現とを破壊するものである！」

また活きた「自然」に對して「書物」を死物と見てゐるやうなところもある。ホメーロ一卷を懷中にして自然の間に逍遙するのがヴェルテルの最も幸福と感ずるところであつた。友人が書物を送らうと云つてきたのに對して「どうぞ止めて呉れ、この躍り狂ふ胸の中だけで十分ではないか、書物に依て刺戟を求める必要がどこにあらう。」と云ひ、また或人を評して「あの人は惜しいことに往々唯聞いたり讀んだりした事柄を口にする。しかもそれが他人の立脚地から出てゐるのだ。」といふ意味の事を述べてゐる。これ等も皆傳習を卑み獨創を尊ぶ精神の發現に外ならない。

殊に禮式といふやうなものにのみ醒醒し、位階とか勳章とかいふものにはばかり憧



がれる人間を罵倒してゐる。伯爵家に招かれて圖らずも貴族の集會に列し、結局紳士や貴婦人連の物議を醸して退席を要求せられ、その事が人の口に上り、「平生から出過ぎた生意氣な青二才だからさういふ目に逢ふのだ、態まゝを見ろ。」と蔭口をきかれてゐると知つたとき若い彼の憤怒は絶頂に達した。

「誰かそれを面と向つて云ふ奴があればいい、さうすれば刀をそ奴の腹へ突込んでやるのに。血を見たら少しは落ち着くだらう。あゝ私はこの苦しい胸を休めるために幾度小刀を手にしたか分らない。優れた馬は恐ろしく興奮した場合には本能的に或脈管を噛み切つて氣を静めるさうだが、私も時々そんな氣持になる。私も脈を切開して永久の自由がえたい。」

貴族に對する反感は一面平民に對する同情となつて現はれる。ヴェルテルは泉に汲む下婢を扶けて水桶を載せてやつたり、不幸な若い百姓の身の上に深い同情を表したり、犯人と問答したりする。この百姓の挿話はヴェルテルの運命に搦んで巧みに用ゐられてゐる。或寡婦に命までもと戀してゐたのが引き離され振り棄てられて、

正直一圖のその若者は「どんな男にもあの女は有たせない、あの女にはどんな男も有たせない。」と云つて女の新しい情夫を殺してしまふ。ヴェルテルは非常に興奮し且同情して裁判官のところへ馳せつけ、寛大の處置を求めたが固より聽れないので大に憤慨する。そして最後に老裁判官が云ひ放つた「いや彼は救はれない！」といふ言葉に強く胸を撲たれて、「不幸なる者よ、汝は救はれない！吾々は救はれないのだ！」と紙片に書き付けた。この法律の權威を輕視するところはトルストイの「人間には人間を審く權利は無い。」といふ言葉や、イブセンがノラに云はせた「そんな法律は悪い法律です。」といふ意味の言葉を想ひ出させる。

一般に俗人氣質フィリステルウムに對する反感が到る處に認められる。ひたすら常識とか理智とか法律とか習慣とかいふものを重んじて人性の本然の聲を抑へようとするのが所謂俗人氣質で、これが世の中の良い萌芽を萎縮させ、自由の精神を窒息させるのである。

アルベルトの好紳士たることを認めつゝも——正義の觀念から特に私心を去つて彼の長處美點を認めようと努力しつゝも——感情の上でどうしても彼と融和しがたいのは、ロツテの夫であるといふ事實ばかりで無く、この俗人氣質が彼等の間に深い溝渠を掘つてゐるからである。アルベルトの面目はヴェルテルと自殺論を闘はして「Paradox i sehr paradox!」と相手の論を駁するあたりに躍如としてゐる。詩人と俗人とは水と油とのやうに永久に調和しがたいのである。

「自己を以て他人を律しようとすることの愚なるは日々認めてゐる。また私は自分の事に忙しい、この胸は嵐のやうに荒れ狂つてゐるから、他人には勝手に彼等の道を行かせたいのだ、彼等さへ私に行動の自由を與へるのなら！」

世間の實際の或は假想の蒼蠅い干渉が彼を刺戟し興奮させ激昂させた上に失戀の深い痛手を負うて彼は終に起つことが出来なくなつたのである。

この外なほハイネの詩などに最も屢々現はれる所謂「生の悩み」(Weltschmerz)が

常にヴェルテルの心を灰色の霧のやうに裏み、かれの情緒に蒼白い光を投げてゐた。悠久な天地に假初の生を托する憐れな自己の姿、理想と現實、欲求と能力との矛盾から生ずる自己分裂の感を抑へることが出来ない。

「人間はその上で享樂するためには僅少の土地があれば宜い。その下で憩ふためには一層僅で足りるのだ。」

道も無い深山の奥から未知の太平洋の涯までも永久的の創造的精神が生きて働いてゐる。禽獸草木皆その生を樂んでゐる。しかも一度眼を轉じてその反面を覗ふと、不斷の創造の裏にはまた不休の破壊力が働いてゐるのである。無限の生命の舞臺は忽ち暗黒な墓穴と變つてしまふ。手に執る間も指す間も無く萬象は刹那に過ぎ去り消え失せる。一瞬間毎が汝及汝の周圍の者の破壊者であり、また汝自身が破壊者とならない一瞬間も無い。何氣ない一投足が無数の微蟲の命を價する。勞苦の結果たる蟻の巢は無殘に踏み蹂られ、小さい世界は憐れな墓穴に變つてしまふ。かういふ

見方からすると宇宙は永久に吞噬し永久に反嚼する一大怪物と化したるのである。

## 五

「ヴェルテル」を一口に感傷的主義センチメンタリズムの文學と評し去るのは間違つてゐる。勿論青年殊に詩人肌の青年は多少感傷的たらざるをえない。またセンチメンツの發達しないやうな人間は決して優秀な人間では無い。それが青年期に過度に走る傾向のあるのは寧ろ自然の現象である。感情の流露は青年の美點である。然し全然感情の放縱に委せて意志の統率を缺けば破滅の淵に陥ることを免かれない。シュツルム・ウント・ドラング期の若い人々が半途で斃れた原因は皆茲に在る。ヴェルテルが短銃を額に當てたのもこのためである。彼は煩惱の羈絆を斷ち切る意力を缺いた。ゲエテの所謂魔力的デモニッシュ(dämonisch)の情熱に捉へられて自ら滅びたのである。さればヴェルテルの悲劇は一方から見ると運命の悲劇であつて必ずしも性格の悲劇では無い。固より彼の性格も時代の子だけあつて情熱的、感傷的、革命的ではあるが、然し今日云ふ意味

で頹廢的デカダンでは無い。多くの健全な清新な素朴な純真な分子を含んでゐる。先きに述べた「自然の愛」の如きもその一である。また多少自己分裂の悲痛を味はつてはゐるが、一方に自己の品性能力を信じて飽迄自己を主張する勇氣に充ちてゐる。従て一方に自己穿鑿グリニューペライ、猜忌、嫉妬等の暗黒な性質を餘り持つてゐない。彼には元來盡きない、打ち破りがたい、何に出逢つてもめげない獨逸語に所謂 unverwundlich のユーモアがあつたやうに見える。少くともその萌芽があつたに相違ない。このユーモアのために彼はその悲惨な運命から救はれたかも知れないのである、恰もゲエテ自身がそこから脱却しえたやうに。この點に就てはヴェルテルが「不機嫌」(Uble Laune)に關して論じてゐるところを見るとわかる。

彼に従へば不機嫌は一の惡德 (Laster) である。自他を同時に毀損するものであるから惡德と云つて差支無い。彼はまた之を人間に於ける最も憎むべき罪惡 (Sünde) だとさへ呼んでゐる。殊に凡ての歡樂を自由に享け容れ得可き若盛り若きの人間が千金

にも換へ難い短かい青春の日を互に澁面を作つて過ごすのは最も腹立たしいこと、後になつて始めて自分の愚かしい浪費に氣が付いても最早遅いのである。

「吾々人間は佳日は少なく悪日は多いと訴へるが、思ふに不當な場合が多い。若し吾々が心を豁いて神が日々授け給ふ好きものを味はうとしたならば萬一禍の來たとき之に堪へうるだけの力を十分持つたにちがひない。」

不機嫌は一種の病氣である。また怠惰のやうなものである。固より稟性にも依るが、意志の力で之を抑制すれば治癒することが出来る。怠け者が一度發奮してみると活動の中に眞の快樂を見出すやうなものである。誰でも好んで不機嫌であつたいものは無いのだから各人宜しくその抑制に努力すべきである。

「吾々が互に幸福にしあふことが出来ないの十分では無いか。たまたに感じうる快樂までも互に奪ひ合ふ必要があるだらうか。そしてまた自分の不機嫌を隠して周囲の人々の喜びを損はないやうにすることが出来る人が幾人ゐるだらう。不機嫌

といふのは寧ろ吾々自身の無價値に對する内的不満では無からうか。一種の愚かな虚榮心に驅られた、嫉妬と常に結び付いてゐる自己嫌厭ではあるまいか。吾々が幸福にしてやらない幸福な人間を見るのに堪へないのだ。ある心から湧き出る單純な歡びを、その心を支配する自己の暴力で奪ひ取らうとする者は禍なるかな。この世のあらゆる贈物を以てしても、どんな種類の樂みを以てしても、一旦吾々の暴君の嫉妬的不快に依て苦くされた自己快感をたとひ一瞬間でも償ふことは出來ない。」

かう熱心に論じ來つてヴェルテルの眼には涙が溢れた。過去の様々の追憶が胸に迫つたのである。之に依てみても彼が徒らに沈鬱に耽り多感を街ふ軟弱な青年で無かつたことが分る。不機嫌は一の頹廢的傾向である。そしてそれが他人の前に現はれるときには多くの場合自制力の缺乏を意味する。世間に出て快活な人間が往々自宅では極めて陰鬱で怒り易いのは一種の我儘から出てゐる。不機嫌を自己の内部から

全く驅逐し去るのは随分困難であらう。力の自信と純潔の意識とが無くてはならない。不機嫌を人の前に包むのは多少の努力である程度まで出来得ることである。これは偽善虚飾を求めたのでは無い。他人の心に對する微妙な顧慮 (zarte Rücksicht) を要求するのである。感情の自由を尙ぶ青年には殊にこの邊の思慮が肝要である。ヴェルテル自身も強い大きいユーモアで一貫する力を缺いた。それで斃れた。ゲエテはその力を持つてゐた。ゲエテの藝術には一面に厭世主義を含み、然も之を容れて餘りある大きい深い樂天主義が流れてゐる。この流れはホメールにも沙翁にも共通である。「ヴェルテル」を書いて「ヴェルテル」から解脱し得たゲエテはやはり大きい。

なほ、ヴェルテルの思想感情が頹廢的乃至虚無的のそれと異つてゐるのは、彼の自由平等が必ずしも極端なものでないことや、「尤も」(Nur)といふ妥協的な言葉を憎み、「全か無か」の態度を取りつゝも徒らに感情の奔放に任せず一方に理智の十分に發達してゐることや、善惡賢愚を識別する標準を疑ひつゝも強い道義的本能を持

つてゐることや、放浪的生活に憧れつゝも家族的生活の温味を忘れ兼ねてゐるところなどに依て之を知ることができらる。

「かく最も落つかない放浪者も結局祖國に憧れ、自分の茅屋の中に妻の胸に、子等の群の中に、家族を養ふ勤勞に於て、彼等が廣い世界で求めて得なかつた歡樂を見出すのである。」

ゲエテの結婚觀、夫婦觀、家庭生活に就て考へるとこの邊の消息が明らかになる。さて最後に一言したいのは彼の否ヴェルテルの女性觀である。「永久の女性」(Die ewige Weibliche)に對する愛と崇拜とは遺憾無く現はれてゐる。動々もすれば女性を享樂の具と見ようとする近代の頹廢的傾向とは著しい相違である。ゲエテの享樂的態度と近代詩人のそれとを比較する場合に最も注意すべきはこの點でなければならぬ。ヴェルテルのロッテに對する愛はどこまでも敬虔なダンテの愛である。そしてこの崇拜的、渴仰的の愛がいつか情慾的所有的の愛に變りつゝあるを自覺する毎に

彼は自ら戦慄を禁じえない——

「私は自分自身を恐れる！あの人に對する私の愛は最も神聖な最も純潔な友愛ではなかつたか。罰せらるべき欲望をこの胸に感じたことがあるだらうか——私は誓ひはしまい！——そして——夢といふものは！噫、これほど矛盾を極めた作用を不思議な力に歸せしめた人々の感じは眞實だ！昨夜！話すさへ身慄が出る、私はあの人をこの腕の中に抱いてゐた……」

最後の會合のときオシヤンの詩の哀調に心を掻き亂されて互に我を忘れて抱擁し接吻したとき、我に復つたロツテが力無い手でヴェルテルを胸から押し退けながら、「最も氣高い感情から出た落ちついた調子」で彼の名を呼ぶと、彼はこの純潔な貞淑な聲の威力に抵抗することができずに思はず彼女を離し物狂ほしく彼女の前にひれ伏すのである。

女性、自然、神、この三者はヴェルテルにとつて三位一體なのであつた。

## 美しき魂の告白

—

ゲーテの「ウイールヘルム・マイステル修養時代」の一挿話に「美しき魂の告白」(Bekenntnisse einer schönen Seele)と云ふのがある。最も深い宗教的感情を以て書かれた美しい物語である。

「美しい魂」と呼ばれるのは或敬虔なヘルレンフト派の尼僧のことで、その經歷は一の魂が如何に神の觀念に目覺め、如何に迷を通して光明に達するかを示す貴重な記録である。

彼女は八歳の時重い病に罹り、夙くも世の享樂から背いて孤獨寂寞の中に悲哀と歡喜とを味はふことを知つた。九個月の間咳嗽と高熱とに悩んだ少女は蝸牛のやう

に自己の殻に這ひ隠れて、眼には父の齋らす動植物の標本を見、耳には種々の物語、とりわけ慈母の誦する聖書の物語を聞いた。斯して病める少女は神に就て聞き、神の創造物の一片を見たのである。この幼時の印象は深く彼女の頭に刻み込まれて彼女の宗教的情操の源泉となつた。病が輕快してからも犬や猫や小禽や小羊などに親み、好で讀書に耽つた。就中基督教徒の迫害を描いた小説が彼女に最も深い感興を與へたといふ。教會で授けられる一般の宗教的教育は却て彼女の心を動かさなかつた。彼女は寧ろ佛蘭西語の學修に熱心であつた。舞踏は始め好まなかつたが後に漸々興味を持つやうになつた。舞踏が縁となつて十二三歳の彼女は繪に描いたやうな美しい二人の少年と心易くなつた。子供らしい愛情が彼女をこの兄弟なる兩少年に結びつけた。殊に兄の方が病身なので餘計に虚弱な彼女の同情を牽き、二人の間は漸々親密になつた。弟が之を嫉んで種々の妨害を試るやうになつた。彼女は自分の感情を寓した佛蘭西文の小話を書いて語學の教師に見せて賞讃を博したこともあつた。

然し同時に戀愛といふ問題に就て考へさせられた。少年との間は弟の策略で疎隔せられた。幾何も無くこの花の蕾のやうな二少年は前後して世を去つた。そして彼女から忘れられた。

彼女は健康を恢復して美しく生ひ立ち世間を見るやうになつた。皇太子の成婚、引續く踐祚の祝典で市は舞踏、饗譚、演劇などの催があり、多數の賓客が入り込んで雑沓を極めた。彼女もその熱狂裡に捲き込まれた。「妾の生涯中で一番空虚な時であつた。」と彼女は告白してゐる。

多くの外客の中にナルチス(Narcissus)と彼女等の仲間て戯れに呼んだ若い廷臣があつた。ナルチスは希臘の神話に見える美しい青年で水に映る我が姿に魂を奪はれて懊惱の餘り自殺したと傳へられる。それは人の愛情に對して無情であつた罰だと云ふ。その血から咲き出た花が水仙である。されば自己の容姿を誇る伊達者だてしやの異名に用ゐられるのであるが、このナルチスも瀟灑な交際社會の花形であつたに相違無

い。然し彼は豊富な知識を持ち世情に通じてゐたので、物語の女主人公の両親に愛せられ、彼女とも親しい交際を結んだ。そしてある宴會で起つた不慮な出來事が二人を許婚の間柄にした。それは無邪氣な遊戯の際に嫉妬深い士官が突然ナルチスに斬りつけて輕からぬ傷を負はせたことである。人々が驚いて荒れ狂ふ士官を取り鎮める間に彼女は一人ナルチスを介抱した。滾々と流れる血が彼女の衣を紅に染めた。これが二人の縁を結んだ。ナルチスが癒えてから士官に決闘を申込んで相手を劇しく傷けたといふやうな事はこの話に餘り關係がない。二人は唯結婚の時期を待つ人であつた。それはナルチスが相當の地位を贏ち得たときと云ふのであつた。

けれども其時期は終に來なかつた。ナルチスの世界と彼女の世界とは漸々離れて行つたのである。彼が花婿として彼女に要求したことは往々彼女の道徳的情操と處女らしい羞恥心とを傷けた。彼女は飽迄自分の領域を守つた。彼女はかの少年に對する愛情を想ひ起した。その時佛蘭西語の教師が云つた「眞劍エルンストハフト」といふ言葉を想

ひ出した。「この物語の女主人公は用心しないと、直に眞劍エルンストハフトな事になるかも知れない。」と彼は云つた。その時彼女ははつとして神に避難所を求めたのであるが、今度も復神に救を求めた。かくして漸々彼女は神に近づいて行つた。神に近づくに從ひナルチスとの間の思想感情の矛盾が著しくなつて來た。彼女は空虚な社交的歡樂に倦み疲れ、自分の素直な心の生長がそれ等の愚かな戯れに依て萎靡せしめられることを痛切に感じた。けれどもさういふ社會から離れることはナルチスを裏切り怒らすことになる。彼は何よりも世間體を氣にする男だからである。彼女はこの矛盾に悩んだ。「妾は涙を持つて寢床に就き、睡らぬ夜を明かして、再び涙に濡れた顔をして起き上がった。強い支柱が必要であつた。けれども妾が愚人の眞似として走り廻はつてゐる中は神様がこの支柱を授けて下さらなかつた。」假令體は無意味な嬉遊たはびりの中に置いても心だけは神に向つて開くやうにしようと思つてもみたがそれは徒勞であつた。愚人の服を纏へば、いつか心まで愚人になり切らずにはゐないのであ



る。

彼女はこの心中の苦悶に腕<sup>もが</sup>き苦んだ。そして終に解決の道を見出した。それは信仰の爲めには戀をも棄てようといふのである。ナルチスとの関係を深く省察して見るとそれは假初の羈絆に過ぎない、容易に断ち切れさうである。彼女を真空の世界に閉ぢ籠めてゐるものは薄い玻璃鐘に過ぎない。それを突き破れば自由の天地が開かれるのだ。

そして彼女は終にその羈絆を絶ち、玻璃を破つた。ナルチスは自然に足を遠くした。彼女は然し心の底でナルチスを愛してゐた。かうして離れてみると新たな眼で男が眺められた。もし自分と信條を分つて呉れさへすれば喜んで彼のものとなるのであらうに！けれども二人の世界は全然異つてゐた。愈々分離の時が來なければならぬ。彼女は長い手紙を書いて男に決心を促した。男は不相變時期を待てとばかり云つて寄越した。彼女は折返へして自分の方からは男の與へた言葉を返しても可

いと云つてやつた。九箇月後にナルチスは望み通り地位を得て彼女に改めて求婚した、但、良人の世間的地位に適應するやうな家婦となるといふ條件の下であつた。彼女は懇懃な謝絶の手紙を書いて、恰も幕が下りると一緒に劇場から急いで立ち去る人のやうに此事件から離れた。そして間も無く男が富豪から妻を娶つたといふことを聞いて心から喜び祝した。もう彼女の平和を亂すものは何も無かつた。續いて起る縁談を彼女は悉く拒絶した。慌しい三月と四月の後に最も美はしい五月の空が彼女の前に輝いた。身も心も健かに晴々しく曾て經驗しないやうな心の安靜を覺えた。彼女は自由に藝術や學問に身を委ね、繪筆を握つたり、讀書をしたり、少數の同好の人々と楽しく交つたりした。社交的歡樂の喪失はこの小さい静かな團欒に依つて償はれて餘りあつた。

「美しい魂」が世間的欲望の根を絶つて一意求道に進んだ徑路は大體以上の様なものである。彼女の兩親の死、伯父の好意、妹の結婚と病死、信仰ある人々との交誼

等の點に就ては茲に語るまい。その代りに彼女の信仰の道程を少しく述べておかう。はじめから彼女は形式的の教義を喜ばなかつた。また神の恩寵救済の證しるしを求める人々の心を淺いと思つた。これ等の人々は眞の宗教的靈感を解しないのである。眞の信仰的經驗の無い人々なのである。彼女にとつては無數の零碎の事件が悉く「われ神と共に在り。」といふことを證明してゐた。それは恰も吸ふ息吐く息が生命の徴候しるしであるやうに確實なのであつた。神は彼女の近くに在り、彼女は神の前に在つた。けれども又恐ろしい不安が彼女を襲ふこともあつた。今迄自覺しなかつた「罪」といふ考が彼女を戰慄させた。自分の心の底にも罪の各の素質があるといふことを認めたととき彼女は恐れ惑つた。ダビデがバテセバに通つた後、悔い悲んで神に祈つた言葉に「視よわれ邪曲よこしまのなかにうまれ罪にありてわが母われをはらみたりき。」といふ一句がある。彼は原罪といふ可きものを認めてゐるのである。しかも「我をあらひたまへ、さらばわれ雪よりも白からん、……あゝ神よわがために清き心をつくり、

わが衷うちになほき靈をあらたにおこしたまへ。」と云て頻りに祈つてゐる。どうしたらこの罪に汚れた心が淨まるのであらう。基督の血に依つてと説かれたが、どうしてその救が得られるのであらう。彼女は永く此疑問の解決に苦んだ後微かに一道の光を認めた。萬物を創造した不滅の言葉の化身の中に彼女が求めるものがあつた。この最も原始的なる者は曾て吾々が住む下界の住民として生れた。そして吾々の通る道を、受胎、出産、死亡といふやうに一階毎に辿つて、この奇異な迂路に依つて、再びやがて吾々が幸福な生活を送るべき光明界へ歸られたのである。かういふ悟りが臙ろ氣な光の中に彼女に啓示せられた。

けれども如何にして此廣大無邊の慈悲あつかに與ることが出来るのであらう。信仰に依つてと聖書に誌されてゐる。然し信仰とは何であらう。記載せられた事柄を眞實と思ふだけの事ならばそれは何の役に立たう。その事柄の効果を自分の物としなくてはならない。この攝取的の信仰ともいふべきものは一種特別の心の状態で、自然の儘

の人間には得がたいものであるに相違ない。ある日彼女は「神よ、信仰を與へ給へ。」と祈つた。胸は張り裂けるやうであつた。涙に濡れた顔を両手に埋めた。その時——彼女の魂はある力に依て十字架の方へ牽き寄せられた、曾て基督が血を流した十字架の方へ牽かれた。それは魂が遠く離れた戀人の方へ牽かれてゆく心地に全く等しかつた。この瞬間に彼女は信仰の何たるかを知つた。「これが信仰なのだ！」かう半ば驚いたやうに叫んで彼女は躍り上がった。この感情は空想とは全く別物であつた。空想も幻影も無かつたが、離れてゐる戀人の俤を想像で描くやうな明確な表象を與へた。

また彼女は靈魂と肉體とが分離するやうな氣持を経験することがあつた。靈が肉を離れて思考するやうに感ぜられた。靈魂と肉體を人が衣服を眺めるやうな眼で見つた。過去の事件が驚く可き程鮮明に現はれ、未來の豫感が生れた。凡てこれ等の事件は過ぎ去つた、來るものもやがて過去となるであらう。肉體は衣服の如く破裂裂け

てしまふだらう。けれども妾は、この能く識つてゐる妾は存在する。かう思はれた。

かういふ靈肉の分離に對して彼女の友なる醫師は眞面目に警告した。外物から離れてかういふ感情に耽れば漸々生活の土臺が掘り崩され、空虚にせられるに違ひない。仕事が人間の第一の使命である。休息の時間は外界の明確な認識に利用すべきもので、これがまた仕事を容易ならしめる所以であると彼は教へた。彼女は從來病勝ちの身として自ら人體の研究に興味を持つてゐたのを、この時から漸々廣く自然界を眺める習慣を養つた。そして一旦信仰を得た安かな心で眺めたとき如何に美しく自然は彼女の前に現はれたことであらう。今や彼女は自然の中に神を見、創造物の中に造物主を讚美することを知つた。

かくして最後に彼女の達した境地はどんなものであらう。吾々は彼女自身の言葉に聽かうと思ふ——

「妾は戒律といふものを一つも覺えてゐない、妾には何事も掟の形では現はれない。

ある衝動があつて、妾を常に正しき場處へ導く。妾は自由に自分の意思に従ひ、制限といふものも悔恨といふものも知らない。有難いことには妾はこの幸福を誰に負うてゐるかを知つてゐるし、又かういふ徳は唯謙遜な心でのみ考へるべきだといふことも知つてゐる。何故なれば妾は決して自分の能力を誇るといふやうな危険には陥らないだらう、それは、若し神の力が護らなかつたならば、各の人間の胸にどんな恐ろしい怪物が産れて生長してゆくかも知れないといふことを明かに認めてゐるからである。

## 二

「美しき魂」といふのはスザンナ・フォン・クレッテンベルグ(Susanna von Klettenberg)といふ敬虔な婦人のことで、ゲエテの母の友人であつた。この人の書簡や談話からこの一篇の挿話が出来上つたとゲエテ自身「詩と真」の中で語つてゐる。

一七六八年の夏ゲエテは學府ライプチヒから郷里へ歸つて來た。身も心も病み疲

れて悄然として歸つて來たのである。三年前に笈を負うて家郷を出たときの涯り無い喜びに引きかへて失意の人として歸つて來た。ゲエテの父は愛兒に對して甚だしく不満であつた。家庭の空氣は重く彼を壓した。ゲエテは愈々沈鬱になつた。彼の健康は六七年の十月に落馬して胸を打つてから兎角勝れなかつた。吐血したこともある。また絶えず消化不良に苦んだ。そして一方には戀の痛手を受けてその跡がまだ癒え切らなかつた。その相手はライプチヒの或旗亭の娘なるケエトヒエン・シェーソップといふ、美しい、優しい、多少人に媚びるやうな、ゲエテよりも三歳年長の少女であつた。烈しい戀愛が二年以上も續いた。少女も亦美しい天才肌のゲエテを心から愛してゐた。彼はこの家で食事をしてゐた。そして一年後に一卷の詩集となつたやうな多くの詩歌を彼女に寄せた。熱い血の騒ぐ青年詩人はしかし間も無く盲目的の嫉妬に悩み、そのために無辜の戀人を責め苛む人となつた。彼女の周圍には絶えず若い男の姿があつたからでもあらう。けれどもケエトヒエンは貞淑な少女で

あつた。ゲエテの爲めに他の客を殊更冷遇することもあつた。それにも拘らずゲエテは往々狂するばかりに嫉妬の情に燃えたのである。そして又一方には良心の苦悶があつた。身分の相違、境遇の隔りが到底この少女との結婚を許さないことを知つてゐた彼は、さういふ末の望み無しに一人の可憐な少女と親んでその胸に果敢ない幸福の夢を描かせることを非常な罪惡だと思つた。それだのにまた思ひ切つて女から離れてしまふことの出来ない自分を絶えず責めてゐた。韻文劇「戀人のむら氣」(Die Laune des Verliebten) は戀する男の利己的な愛情を描き、そのために云ふ可らざる苦みを受ける女の身を憐んだ若いゲエテの懺悔の一片である。

ゲエテは茲に勇氣を起こしてケエトヒエンとの關係を友情的のものに變へた。女は素直に諦らめた。「彼女は天使のやうな女だ。」とゲエテは涙を以て一友に書き送つた。後にこの少女はある學士と結婚して幸福な家庭を作つた。ゲエテは歸郷してからも昔の戀人のことを夢みることがあつた。

かういふ身心の創痕に惱んで危く「何人も通過しなくてはならない大いなる海峡」に連れて行かれさうになつた彼も若さと生得の健康の力とに依つて漸々快よくなつていつた。十二月の始めには一時危篤にさへ陥つたのが、翌年の三月以後は雪に埋れてゐた草木が緑の芽を吹くやうに若い力を恢復して來た。ゲエテが世間と遠ざかつて靜かな室内の生活を送つたといふことは詩人の眼を内部に向け、胸の中に湧く泉の音に耳を傾けさせ、彼の思想感情を淨化し、深めたといふ點で寧ろ好い影響を與へた。そしてかの「美しき魂」なるクレッテンベルクから受けた慰藉と暗示との如きは詩人の宗教的情操を培ふ上に最も與つて力あるものだつたのである。

ゲエテの言葉に依れば彼女は慢性的の病氣に悩める中背の極めて優しい婦人であつた。彼女が病苦を靈魂が假初の旅中に經驗する必然な運命と諦觀して快活な氣分と平靜な態度とを以て堪へ忍んでいつた有様は誠に驚嘆すべきものであつた。彼女の言行は極めて自然で且優美であつた。ゲエテはこの人に依て神に導かれ、また神

秘的思想に引き込まれた。そして一時は錬金術などを眞面目に研究した事さへある。けれども彼は當時の敬虔派ピエティズムの餘弊ともいふべき涙脆ろい一種の宗教的感溺に陥ること無しに、汎神論の色彩を帯びた独自の宗教觀を樹てて一時の安心を求めた。

ゲエテが語つてゐるやうに「美しき魂」の基督に對する關係は女性がその戀人に對するそのやうなものであつた。絶對的の服従と無限の信賴とを以て一身を基督にうち委せて、凡ての喜びと凡ての希望とを基督の一身に懸けてゐた。同じ信仰の友でもラヴァーテル(Lavater)に於ては基督は敬愛する友人のやうなものであつた。その力と事業とを欣慕して之に追隨しようと力める友人であつた。こゝに兩性の信仰の分れ目があつた。

若いゲエテの樹てた宗教觀は新プラトニー派の思想が根底になつて神秘主義の要素の多分に交つた不思議なものであつた。神は無始から自己を創造しつゝある。創造は雑多無しには考へられないから神は必然的に第二者として現はれる。神の子がそれである。神と神の子とは更に創造を續けて更に第三者の中に現はれる。これも亦等しく存立し、生き且永遠なものである。こゝに於て神のクライス圈は閉ぢられた。全然同一のものを更に造り出すことは神と雖も不可能であらう。然し創造力は更に續いて行つた。その結果彼等は更に第四者を造つた。これは然しそれ自身既に矛盾したものであつた。神の如く絶對的であつて、同時にその中に含まれ、それに依て制限せられてゐるからである。これが惡魔ルチフェルである。今や創造力はこのルチフェルに移つて、こゝから凡て他の存在は生るべきことになつた――

この思想の開展は「詩と眞」第八卷に譲つて、最後にもう一度「美しき魂」に立ち歸りたいと思ふ。

「若い、生々した、眼に見えない救ひを憧がれ求める心」とは當時若いゲエテが自ら評した言葉であるが、これは移して現代の多數の青年の心と見ることが出来ると思ふ。眼のあたり歐洲の物質的文明の慘ましい破綻を眺め、省て知識のみに依ては

充たすことの出来ない自己内部の缺陷を自覺するとき、刺戟から刺戟へと轉々して神經の麻痺に一時の陶酔的歡樂を味ひながらも何處からとも無く忍び寄る不安の暗い影を拂ひ退けることが出来ないとき、多感な青年の心は、不知不識に「美しき魂」の愛撫といふやうなものを求めてゐはしないだらうか。ゲエテは男性的の性格の一面に女性的の物に倚り縋るやうな心を持つてゐた。彼はいつも暗い欲求と烈しい情熱の海から自分を救ひ出して呉れるやうな、その人の前には何事も打ち明けられるやうな人物を必要としてゐた。シユタイン夫人もその一人であつた。それは美しい聰明な姉のやうな人であつた。そしてクレッテンベルクは優しい慈母のやうな人であつたに違ひない。ゲエテの所謂「久遠の女性」の觀念はこの「美しき魂」に依て大部分涵養せられたものでは無からうか。

吾々は感傷的な或は神秘的な宗教的情操を要求するものでは無い。けれども重い熱病に罹つて呻吟してゐるやうな現今の世界が、衰へ疲れながらも云ひしれず快いある。恢復期に向つたならば、必ず強い宗教的要求を持つに相違無いと信ずるものである。否、既に戦亂の最中に於て、塹壕の夜や、教會の朝に熱心な祈禱の聲が聞えるのである。

傷き疲れた歐洲國民のために「美しき魂」となるものは果して誰であらうか。私はそれに對して何も答へることが出来ない。唯、形式的の教義が全然この方面に無力であることは確實である。同時にかの Pietismus の復興の如きも、よし起つても、一時的現象に過ぎず、到底民衆を率ゐる力は無いと思ふ。要するに、その形は問はず、自然と人生とに對する敬虔の心をさへ失はなければ早晚必ず信仰に入れるものと信ずる。ゲエテやケルレルの生涯と作品とが吾々にそれを語つてゐる。

## 四十歳の男

一

女には「危険な年齢」といふものがあつて、一種の生理的變化から精神状態に至大の影響を及ぼし、著しく神経の昂奮を來たし、その結果往々道徳的情操を危殆に瀕せしめることがあるやうである。然るに男は幸にかういふ生理的の難關を通過せず、に済んでゆくが、同じ時といふ流れに棹さす身であつてみれば、生命の不思議の泉から湧き出て紆餘曲折の人生を通り抜けて終に寂滅の海に流れ込む迄には幾多の急湍や深淵を經過しなくてはならない。中にも「四十歳」といふ年の瀬はかういふ難處の一つに數へられてゐる。實際四十歳前後にもなると記憶力が鈍り精力が減じ一般に肉體の衰へを感ずるといふことは屢々耳にすることである。固よりこれは人種に

よつても異り、個人の間にも差があるには相違無いが、髪や鬚に灰色のものが眼について來る頃はやはり肉體の秋と云はなくてはならない。男の十代を蕾と見、二十代を盛りと見れば青葉は三十代、その明るい新緑が漸々暗色を帯びていつて終には朽葉色が兆して來る時分には、いつか青い菓實の粒も太つて四十代の秋は近寄るのである。「戀は去り愛は残る、花散りて實結ばざる可らず。」とシルレルが歌つたのもこの心である。

されば「四十歳」は男にとつても亦一の回轉期で同時に一の危機である。人は今崖の上に立つてゐる。脚下には暗黒な寂寞な「老年の谷」が呀然として口を開いてゐる。願れば山岳重疊して故郷は雲の底にある。こゝて人は自ら樹の根、岩角に腰を下ろして來しかた行末を考へずにはゐられない。四十は男の盛りだといふ。然しこれは少くとも肉體の上にはあてはまらない。千金換へ難い青春の時代は既に遠く去つて永劫歸つては來ない。その青春の特權を自分は果して遺憾なく用ゐたてあらうか。



古の人も燭を秉て夜遊んだといふ。その少年の時を惜む心が今再び四十歳の男の胸に新らしい勢を以て燃え上りはしないか。そしてまた一方には眼前に迫る老年の暗い、寂しい影がある。更にその背後から洞穴の様な二つの眼を持つた「死」が覗いてゐる。自ら人は事業のことを思はざるを得ない。「最も善き歳」は人間の精力の「絶頂」<sup>ヘエブシク</sup>を意味すると同時に直ちに「轉向」<sup>ウムケール</sup>に接することを思はせる。自己の生の何等かの痕跡をこの世に残すのもこの幾年間に於てはなくてはならない。かうして人は屢々悔多き過去と寂寞なる未來との間に在つて不安な現在を送らなくてはならない。悔恨と咏嘆と焦慮と絶望とは四十歳の男を驅て往々憂鬱症<sup>ヒポコンダリー</sup>に陥らしめる。而してそこから不思議な情熱を以て生れ出るのが所謂「中年の戀」である。この戀は人間の生の執着の最後の唸き聲である。

## 二

私はこの頃ワツセルマンの「四十歳の男」(Der Mann von vierzig Jahren)と云ふ

小説を讀んで心を撲たれる節が多かつた。何故なれば吾々は生れかはつて來ない限り「女の危険なる年齢」の内容を経験することは出來ないが、男のこの危機は早晚通過すべく強ひられてゐるからである。

「不測の原因で星がふとその光を失ひ一時或は永遠に無限の暗黒界に消え失せることがある。それと同じ様に人間もある時期を境としてその運命が暗い影に掩はれてゆくことがある」——からワツセルマンは書き起こしてゐる。四十に近いある貴族が十年連れ添うた美しい妻を捨て、七歳になる天使のやうな娘を残して飄然と家出をするといふ物語である。物質的に何の不足も無く、教育も趣味もあつて、社會問題に對しても新らしい意見を懷抱してゐる紳士である彼がどうして家出をするこゝたになつたのであるか。二歳若い、同じく貴族出の妻は才色共に勝れ、家政の術に長じ、優雅の中に一種毅然として犯す可らざる意志を藏してゐて、彼にとつては缺く可らざる伴侶となつてゐる。されば何時からとも無く夫の様子が變つて漸々陰鬱

に傾いて行くのは全く解しかねた。好物の料理を薦めて見ても、英國産の獵犬や新式の獵銃を贈物としても夫の顔色は一向浮き立たない。鏡に映る自分の沈み切つた顔に昵と見入つてゐることもある。深夜圖書室の内を往復する夫の蹺音を聞きつけて窃と忍び足に近寄り、軽く戸を叩いてみると、俄にふつと燈火を消して暗闇の中に音も立てない。思ひに堪兼ねて妻は姉の家に向日を過ぎ、その留守の間に夫は飄然として家出をして仕舞ふのである。一本の置手紙も無く、何等の手懸りも無い。唯銀行から二十タアレルを引き出したことだけが分る。男が女の心を知り悉し得ないやうに女は畢竟男の心の底を測りえない。夫の家出の裏面には「四十歳」が潜んでゐたのである。

夫婦の間柄は最初から男が受働的であつた。女の意志と情熱とが自由を欲する男の若い心を抑壓し、牽制し、終に征服した。女は男にとつて缺く可らざるものとなつたと同時に極めて家常茶飯的のものとなつた。子は然し二人の間の楔となつた。

けれども不安は男の心の中に巢を喰つてゐた。それが不圖ある朝第一の發作を見た。夫は妻の寢室に入つた。妻は鏡面に向つて髪を直してゐた。「飽きる程見せられて來た圖だ。」かう男は思つた。「今に屹度彼處を押へてあゝするぞ。」果してその通りであつた。男は不快になつた。すると椅子の上かひものに脱ぎ散らされた妻の衣服や、靴や、下着類まで忌はしいものに映つた。臥床の被物が捲れてゐて、そこから女の移り香が洩れて來たが、男は最早何のなつかし味をも覺えなかつた。この時から不快と不満とが男の心を捉へた。彼は妻の爲に青春を奪はれたやうな氣がした。彼女は自分の幻影と希望との盗人であつた。十年間の結婚生活は追放であり囹圄であつた。自分は彼女に復讐しなくてはならない。かう彼は思つた。一方にはまた老いゆゑ恐怖が彼を捉へた。鏡は時の破壊の痕跡を證據立てた。顔の皺と、落ちかけた頬肉とが彼の心を曇らした。その後ある日のこと妻が知合の妻君と對話してゐるのを見た。彼が二人の方を見ると客の女が彼の方を窃と見て嬌態しなを作つた。彼は起つ

て客の女の傍を通り過ぎ袖で女の衣服に觸つてみた。この時に彼の心には家出の決心が熟した。もう一度自由にならう。或は破滅を招くかも知れないが、妻子を捨て、家を出よう。出ずにゐても恐らくこの破滅は避け得られないのであらう。彼は妻の後ろに廻つて立つた。妻は彼を仰いで満足氣に微笑した。夫の顔にも微笑が漂つてゐたからである。然しそれは同時に見上げた客の女に向けられた笑顔なのであつた。男の眼は見慣れた美しい妻の顔よりも平凡な客の女の顔に牽かれた。それは唯若々しい可憐な、そして見慣れない顔であつた。もう一度自由にならう。目的も制限も無い生活を送つてみよう。「捉へつ捉へられつ」といふ言葉は未開の森のやうに彼の前に横はつた。千態萬狀の人生の姿を思ふと青年の時に感じたやうな戦慄が彼を襲つた。彼にも戀愛の經驗はあつた。然し、忽ちに今迄の生活の全部を滅ぼして新生を造り出すやうな、刹那に融解し、刹那に集冲するやうな劇しい感情はまだ知らなかつた。これは誰でも知つてゐるやうに見えて實は擇まれた神の寵兒だけ

が知る感情である。彼はそれを知らうと思ふのである。よしまた終に知り得ずして歸つて來ても、少くともこの世には彼にとつてかゝる感情が存在しないといふことだけは知り得る道理である。

## 三

家出後の彼の生活は放縱を極めたものであつた。十八歳の猶太の少女を始め彼は多くの犠牲を見た。殊に巴里は彼にとつて恰好の歡樂の巷であつた。彼は嘗て少年の時に新らしい葡萄を一杯盛つた籠の前に座つて、格別飢えてもゐなかつたが、初生りの物珍らしさに兩手をその中に突込み握れるだけ握つて、顔も口も齒もその水々した房の中に埋めるやうにして貪り喰べた。甘い汁は顎を傳ひ胸に流れ衣服を濡らした。丁度巴里は今この葡萄籠のやうに彼の前に横はつた。一日は十七時間、或はそれ以上もあつた。そしてその何れにも刺戟の無いのはなかつた。彼は當時の巴里を根本的に知り抜いた。戦慄すべき妖魔の群は酔ひ狂つてゐた。人々は唯刹那に

生きることにのみ腐心して、貧しい内容を派手に飾つて人目を眩惑するのに汲々としてゐた。美と純潔とは溺れる人の太息よりも果敢なかつた。彼はこの戦慄の巷に對して單に觀察者の態度は取らなかつた。彼は自らその渦中に投じた。彼は甘さを求めて花から花へと飛び移る蜜蜂のやうに種々の女性に接してまた離れた。ある優しい名、ある愛の言葉、ある奇異の姿態が記憶に残ればそれで十分であつた。彼のために富貴の家を追はれて倫敦の怪しい賤婦の群に投じ、終に路傍に屍を曝す英國の貴婦人もあつた。極めて小さい手足を持つてゐるので有名なる伊太利生れの女と關係して一週間で別れたこともある。指環一個で唐物店の娘を我物にしたこともある。信仰厚く淑徳の譽高いので有名なる醫師の若い妻に患者に化けて近づいて終に墮落せしめたこともある。如何なる罪惡の巷も彼の知らない處はなかつた。終には賭事にさへ耽り、莫大の損失を蒙つた。そして彼は人の勧めに任せて倫敦に移つた。

## 四

「自分自身に倦きるといふことは死よりも恐ろしいものである。各の思考は批難となり、心は憂鬱の中に窒息し、歩みはその目的を嘲り、眼は凡ての物から嫌惡を吸ひ取り、手は何處へ延ばされても何物も掴まず、口は語ることを欲せず、耳は聴かうともしない。夕に衣を脱ぎ、朝に衣を着る、何の爲であるか。人は何がためにしかく急ぎ、笑ひ、否定し、肯定するのか。人間の美醜も何であらう。その去就離合も我れに於て何の關はるところがあらう。燈火を點じ、燈火を滅し、壁を飾り、市を装ふ、悉くこれ徒勞では無いか。恐ろしく徒勞なるものでは無いか！……」吾々の主人公はかういふ暗い氣分に陥つた。所謂「食後の嘔氣」<sup>ナツハグイツシユエーケル</sup>に襲はれたのである。彼は家出前よりも一層沈鬱になつた。終日部屋に閉ぢ籠つて窓の戸を下ろしたまゝ、暗闇に凝と座つてゐた。他人の顔を見るに堪へがたく、往來の物音が頭に響いた。彼は好んで夜更に獨り家を出て河のほとりを歩き、橋の欄干に凭れて、水の流れや、

扁舟や、小蒸汽などの行き交ふ様を眺めた。彼の悲みは生の最も深い底から流れ出た。そしてその悲みと共に折々涯り無い憧憬の念が湧き上つた。

間も無くこの憧憬が美しい女性の姿となつて現はれた。それは當時到る處に若い人々を牽きつけ、酔はしめ、狂せしめた美しい歌姫であつた。この女のために病軀を演奏場に運ばせて一生の思ひ出にシューベルトの「旅人の歌」を聴き終つて絶命する老男爵もある。この歌姫が終に彼の運命となつた。始めは多少の反感をさへ懷いてゐた彼は終には全くこの女の優しい、淋しい、氣高い人柄に捉へられてしまつた。彼女無しには生きることの出来ない人となつた。然しこの女性は一種犯す可らざる道德觀を懷いてゐて、男に結婚の神聖を説き、いつか自分の胸に萌した戀の芽を無理に摘み取つて、崇拜者の一人なる若い貴族と婚約を結んで仕舞ふ。彼女の考に従へば結婚して子まで成した男女は縦令その間に愛情が冷え切つても再び離れ難い因縁が結ばれてゐるのである。結婚は愛の上に超越してゐる。男は女の中に、女

は男の中に餘り多く入つて居る。男の居る處には女も居る。常に、常に必ず居るのである。これは血の法則である。

「——唯御身幸福におはさんときにのみわが身も幸福ならんと覺え候。さてまた幸福なる身となりて我とわが身に満足しうる境涯に到り候ためには力と純潔とが必要かと存じ候。私の心は御身に對する感謝の心に満ち居り候。私は御身を胸の中にかき抱き、御身と共に生きてゆくこの私の心を御身に通じ得るやうな言葉が欲しく候。「友達」といふ言葉にては不十分に御座候。何か新しき未だ聞きしことなき言葉が欲しく候。御音づれば賜はる間敷候。御返りごとも御無用に願上候。——」

この手紙を讀んで男は絶望の淵に投げ込まれた。彼はこの女のために妻と絶縁すべく家に歸つたのである。

然し沈み切つた男の心が再び動搖する時が來た。それは一八七〇年の夏のことである。「戦争！」といふ聲が何處からとも無く響いて來た。獨逸人の血は一時に沸き

上つた。四十歳の男の脈には軍人の血が流れてゐた。彼には最早彼一個の権利は無かつた。彼は唯凡ての人の権利を有つてゐた。彼が愈々剣を持つて起たうと決心したとき彼は曾て無い程愉快を感じた。

男が激しい市街戦で重傷を負ひ、看護婦として遙々戦地へ来た雄々しい妻の介抱の下に漸々癒えてゆく迄の経過は茲に語る煩を避けようと思ふ。唯その肉體の傷と共に心の傷も漸次に癒え、その傷の痕から再び愛情の芽がふいて来たことは特に記しておきたい。

「春にもなればジルヴェステル(男の名)は既にアガアテ(妻の名)とジルヴィア(娘の名)に介けられて散歩することが出来るやうになつた。媾和が成る頃には全く健康と力とを回復した。暗黒と紛亂から脱して彼の心は再び光明に向つた。足る事を知るは必然の結果であつたが、自ら抑へることを學んだのは戦争の賜物であつた。生きるとは好き事であつた。さて活動は一層好き事であつた。そして不快な衝動の

萌芽と繁茂とはその日様々の勞苦によつて緩和された。それを一層容易ならしめたものは、生命の時計の針が休まずば、四十歳の男は臆て五十歳の男になるといふ事實であつた。」

## 五

不安から耽溺へ、耽溺から憂鬱へ、憂鬱から憧憬へ、更に絶望と發憤とを経て諦觀に達する主人公の心理的過程は定型的な性質タイプカルを帯びてゐる。享樂から活動へ、自愛から他愛へ移つて始めて靈の安息を得るのも亦人心の一大趨向と云はねばならない。この意味に於て永久に象徴的價值を有するものは「ファウスト」である。ファウストも亦灰色の書齋生活を呪ひ、巫女の魔藥を飲んで若返へつて徒らに過ぎした青春の享樂時代を取り戻さうとし、不圖斷腸の悲劇を演じ、具に世相を觀て、博愛的思想に到達し、淋しい諦らめの中に靈性の安慰と救濟とを見出すのである。

然し「四十歳の男」に於ける私の興味を中心は前にも述べたやうにこの年齢に伴ふ

Resignation

Futurismus

多少定型的な心理状態であつて、この點ではゲエテの「親和力」(Die Wahlverwandtschaften)の比較が最も適切である。恐らくワッセルマンも意識的又は無意識的にゲエテの作の觀念を念頭に置いてゐたのではあるまいか。「親和力」の主人公も同じく富める中年の貴族で、その性格の主我的で感情的で意志の薄弱な點が、かの「四十歳の男」に肖てゐる。妻も賢明で、男性的の傾向を持つてゐる點が共通である。そして「親和力」の女主人公とも云ふべき眞珠のやうな少女は「四十歳の男」の渴仰の對象となつた歌姫に當る。ゲエテの作が「諦らめ」を根本思想としてゐるやうに、清淨無垢な歌姫は同じ思想を體現してゐる。唯「親和力」の妻には大尉といふ心の戀人があるが、「四十歳の男」の妻にはわづかに「友人」があるばかりで、その關係は同情といふ程度を出てゐない。この男は暗い運命を背負つて生れて來た天才肌の革命兒で、自分の熱愛する獨逸の社會から云ふ可らざる迫害を受け、妻には見棄てられ、最愛の子は法律の力で無理に奪ひ去られ、終に絶望して佛蘭西に走り、戦争が始まるや

佛軍に加はつて偶然にも舊友なる「四十歳の男」と干戈の間に見え、知らずして友を傷け、自分も獨逸人の刃の下に斃れるのである。さてこの主人公が戦争に出るといふことは、多少動機を異にしてはゐるが「親和力」の方にもある。唯後者の晩年はその戀人の自殺によつて頗る寂寞を極め、終には「トッゲンブルグの騎士」のやうな最後を遂げるのであるが、「四十歳の男」は諦らめの中にも希望の光を認めてゐるといふ差がある。要するに「結婚の神聖」を認め、「諦らめ」を説くといふ根本思想に於て二つの作はよく似てゐる。同時に兩主人公の心の動き方を仔細に比較すると深い興味がある。それは同じ方向に動いてゐるが、そこにゲエテの時代とワッセルマンの時代との差異が顯著に現はれてゐる。ロマンチックの色彩を帯びたクラッシズムの空氣と自然主義を経た新ネオロマンチズムの空氣との違ひが明かに感ぜられる。情意の融合と理知の透徹とがかれにあれば、自我の執着と官能の陶醉とがこれにある。「親和力」のエツアルトの苦悶は調子の狂つた胡弓サオリイネの啜り泣きの如く、ジルヴェステ

ルの懊惱は傷いた野獸の唸き聲に似てゐる。

## 六

同じ「諦らめ」の小説として「キルヘルム・マイステルの遍歴時代」の中に入つてゐる「五十歳の男」(Der Mann von fünfzig Jahren)といふのも前の二作とその中心思想を等しくしてゐる。これは老年のゲエテが十八歳の少女ミンナ・ヘルツリイブに對する戀の寂しい諦らめの情を寓したものと傳へられてゐるが、五十歳の非職少佐とその若い姪との戀を描いたもので、後にはその戀を息子に譲り、息子の戀を斥けた妖艶な寡婦に近づいてゆくといふ同じく一種の「親和力」を書いてゐる。しかも純潔なその少女は親から子へと愛情が移つてゆく自分の心を悲んで、息子との結婚を承諾しないので、結局これ等の人々の「諦らめ」に歸着してゐる。最も興味があるのは「五十歳の男」の心が戀と共にある點まで若やいて行つて、その情熱が恰も蠟燭の最後の強い光りのやうに、ぱつと燃え上がつてふと消えると俄に老の到れるを知ると

いふその微妙な心理的過程である。或時主人公の前齒がほろりと抜けて、隣の齒も搖ぎ始めたといふ條の如き人をして愴然たらしめるものがある。この老年の悲哀はイプセンの「死者覺醒の時」などにも覗ふ事が出来るが、私はもう一つトオマス・マンの「ヴェニスに於ける死」(Der Tod in Venedig)を擧げておきたい。これは五十の坂を越した文壇の老大家がヴェニスに漂浪の客となつて不圖波蘭の貴族なる世にも比ひ無い美少年に心を牽かれ、戀の奴となつて終に悲惨な最後を遂げるといふ筋で、主人公が美を求める藝術家であるだけに極めて複雑な心理解剖が試られてゐる。最後にこれ等の作の主人公に共通な興味ある一現象を指摘しておきたい。それは四十歳の男も五十歳の男も一度戀を始めると自分の肉の衰へを痛切に感じて、あらゆる手段を盡して人工的にそれを掩ひ隠さうと努力することである。女のやうに化粧を凝らし、美顔術を試み、派手やかな服装をして、舉動を力めて若々しく見せようとするのである。ファウストは巫女の魔薬で忽ち若返へるが、「四十歳の男」は忠



實な、斯道に経験ある僕に美顔術を施させ、髪や鬚を青年の型に刈り、顔には脂を塗り、香水を擦り込み、その他あらゆる手段を試させる。「ヴェニスに於ける死」の主人公は曾て青年の風を粧ふ老人の姿を見て云ふ可らざる嫌悪の情を感じ、戦慄を禁じ得なかつたに係らず、いつか自分もその奇怪な姿に近寄つてゆく。五十歳を越えた男が香料を用ひ、寶石を飾り、クリームを塗つて皺を延ばし、唇を染め、紅い襟飾を着け、華やかな色のバンドを鰐廣の麥稈帽に纏はせた姿は自然の不可抗力に對する人間の憐れな無益な努力を示す深刻な悲喜劇的光景である。「五十歳の男」ではこの化粧術を主人公の舊友なるある老俳優が組織的に傳授することになつてゐるが、これは極めて好き思ひつきと云はなければならぬ。主人公がその舊友に對して自分の希望を云はうとして流石に心に耻ぢて躊躇する邊の描寫が微妙を極めてゐる。

## 七

話が自ら技巧の問題に移つたこの機會を利用して私は以上の作の藝術的批評を簡

單に附け加へておきたい。

ワッセルマンの筆には一種の魅力がある。暗示的な筆致で人を牽き付ける。色彩は飽まで強烈である。譬へて云へばポアンチリストの畫に對するやうな感がある。然しながら餘りに挿話が多く、餘りに事件の變化に富んでゐて泌々と情意に透徹するものを持つてゐない。部分美はあつても全體として印象が淡い。之をゲエテの作などに比すると線が太く粗剛で寧ろある作の梗概を讀む感がある。何物をか掴まうとする作者の不斷の努力は認められるが露西亞あたりの影響が眼について未だ純一な藝術品に成り了しないやうに思はれる。神秘と深刻とを銜ふやうな態度が見えないても無い。然しながら巻を繙くとすぐ吸ひ込まれるやうになつて終りまで興味に牽かれてゆくのは確に作者の筆の非凡なことを證據だてゝゐる。

ゲエテを讀むのは大なる慰藉である。ゲエテはあらゆる美しい思想感情の滾々と湧き出る泉である。譬へばルネッサンス時代の伊太利の名畫に對するが如く、時の

隔りを超越して唯その壯麗を極め精緻を盡し、しかも悠揚として迫らざる靈筆に魅せられて恍惚たるばかりである。現代に遠いといふのは謬りである。現代を越えてゐるのである。古今に亙つて眞なるもの美なるものを描いてゐるのである。

トオマス・マンの筆は現代獨逸文壇に異彩を放つてゐる。その描線の明確精緻なること近代版畫の逸品に接するおもひがある。細に入り微を穿ち秋毫の亂れも見せない手腕は嘆賞に價する。或はその繊細な筆致と鋭利なアイロニーとから見てサツカレーに比する人もある。一般に英文脈があると認められてゐる。そして一方に愛と情味とを缺くといふ批難は蓋し當てゐるのであらう。然し同時に作者が常に「愛せんとして愛しえざる苦惱」を痛切に味はつてゐることも見通すことが出来ない。

終りにワツセルマンは「四十歳の男」を一九一三年、即彼の満四十歳の時に書き、トオマス・マンは「ヴェニスに於ける死」を同年、即彼の満三十八歳の時に書き、そしてゲエテは殆六十歳の時に「五十歳の男」を書いてゐる。

## 文藝に現はれたる宿命觀

### 一

運命といふ言葉を廣義に解すれば殆ど凡ての文藝は人間の運命を取扱ふものだと云へる。即、人間の經歷といふことゝ大差無いのである。或女の運命を描くとは畢竟其女の一生を描くことになる。人間の一生は意志の力のみで左右せられ得るものではない。人間以上の力が入つて来る。昔から「人事を盡して人命を待つ」とか「か

の天命を樂んで何をか疑はん」などと云はれる。漱石氏の如きも晩年には確か「則天去私」といふやうな意味の句を座右の銘とせられた。何人も結局其處に落ち付くことと思はれる。これは廣義に於ける運命であるが、更に狹義に於ける運命を考へると、前者よりも著しく固定的のものとなる。即、所謂「宿命」<sup>フエイト</sup>と云ふものになるの

である。生れる前から其人の生涯を豫定する或偉大なる力である。何か人間以上の大きな意志があつて支配してゐる。若し、それが盲目的のものであれば所謂偶然チャンセスとなる。又之を審知的のものと見れば、神の意志とか宇宙意思とかいふ宗教的のものになる。所謂「天道」と云ふやうなものが人間の行動を支配して居る。今述べるのは狭義に於ける運命、即「宿命」の問題である。實際生活の上から見ても、この意味に於ける宿命観は意外に深く人心に根差してゐる。「星」とか「運命」とかいふことを信ずるものが非常に多い。「合性」といふやうな事は勿論、極めて外面的な年齢の差といふ數學的關係までが人生の一大事である。「結婚」を定める上に重大な影響を持つ。「星」に關する迷信（と云つて差支無いと思ふが）は中世に於て星占術といふ立派な學問にさへなつてゐた。シルレルの「ワルレンシュタイン」劇を見ると、あゝいふ英雄でさへ「星位」といふものに絶えず心を煩はされてゐる。相場師ばかりでなく、豪い人も空を眺めてゐるのである。其他「方位」を氣にする者も多い。教養

のある人でも、「鬼門」は恐れる。「家相學」の勢力は決して侮り難いのである。又平生はかゝる事を一括して「迷信」と嗤つてゐる者でも病氣の時や逆境に陥つた時などには不知不識の中に之を信ずるやうになる。

更に宿命觀念の一つの現はれは所謂「賭博心」である。僥倖を望む、スベキユレーションの心は人間にとつて殆ど本能的のやうに思はれる。然らば、この宿命觀念がどういふ風に文藝の上に現はれてゐるか。以下之を畧説しようと思ふ。

## 二

日本の歌舞伎狂言の如きは殆ど悉くこの考へに充たされてゐると云つて可い。それは佛教の因果觀念に基くもので、「因縁づく」、「約束事」、「何の因果か」といふやうな文句が到る處に見出される。全體の「筋」そのものが全然「偶然」チャンセスで出来てゐるものが尠くない。西洋の方でもこの觀念は餘程古くから入り込んでゐる。

まづ最も有名なのは希臘の運命悲劇である。希臘神話の成立を一言すると、先づ

「混沌」<sup>カオス</sup>から「地」<sup>エルデ</sup>が生まれ、地は「天」<sup>ツラノス</sup>と婚して「下界」<sup>タルタロス</sup>、「愛」<sup>アモール</sup>等を生んだが、ウラノスは我子等の威力が自分を凌ぐことを恐れて、虐殺を試みた。エルデは之を怨んで一子ザトウルヌスと謀つて、ウラノスを寢所に襲ひ、利鎌を以てその男根を切つた。その血が下界へ流れ落ちて、かの虻の毛髪を振り亂す恐ろしい復讐の女神エリニエンとなり、其精氣海中に入つて泡沫の中から戀愛の女神アフロデイトが生れ出た。その他「夜」の女神には「睡」、「死」、「夢」の三子があり、更に運命女神<sup>パルツェン</sup>と稱せられるクロト、ラツヒエジス、アトロポスの三神を生んだ。そして、一方には最も恐るべき復讐の大神ネメジスがある。凡そ希臘の諸神は皆「運命」の支配から脱却する事が出来ない。オリムプの神々の内部にも罪と呪ひの種は夙に播かれたのである。更に神と人間との交渉から諸々の罪惡が生れ、不祥な宿命が醸される。有名なエヂポス王の悲劇の如き、父を殺し母と婚する運命の網を終に脱し得ぬのである。所謂「神託」<sup>オラケル</sup>なるものが「宿命」を具體的に現はしてゐる。そしてそれは概ね皆祖

先の罪業の酬である。ゲエテが「イフイゲニイ」に於て簡潔に描いてゐる「ペロピードン」の運命、ゾフォクレス、ホフマンスタアルの「エレクトラ」の悲劇等が明かに之を語つてゐる。これ等の希臘的運命觀に就て最近「歐羅巴の滅亡」と云ふ本を書いた獨逸のシュペンゲルと云ふ學者はかういふ説を吐いてゐる。即ち希臘人の考は固定的である。彫刻で云ふと希臘の裸體像は表情に乏しく、眼睛も點ぜられてゐない。希臘人の生命觀が彫刻に現はれてゐるのである。これ所謂「アポロ的人生觀」であつて、固定した運命觀が支配してゐる。之に對して西歐文化の立脚地は「ファウスト的人生觀」である。ゲエテの「ファウスト」の根本觀念は「努力」と「愛」とである。男性の本體は「努力」であつて、女性のそれは「愛」である。男性的努力の極、女性的愛の天恵が降り、人間は救濟せられるのである。即ち、こゝには人間の「意志の力」が認められてゐる。努力精進して天命を俟つのである。

## 三

かく自由意志を認めたゲエテ其人の運命観を見ると、案外にも其處に著しく宿命的思想が入つてゐるのは面白い。自傳に依ると、ゲエテは七歳の時リサボンに大地震があつて六萬の生靈が或は壓死し、或は焼死した。幼いゲエテはこの慘狀を耳にして、神の慈悲といふものに對して深い疑惑を懷くやうになつた。教會の牧師の説くところと實世間の現象とは如此矛盾してゐるではないか。昨日までも神の恵みに浴してゐた無辜の人々が忽ちにして悲惨な最後を遂げるとは何故であらう。かくしてゲエテの心には「運命」に關する考が芽ざしたのである。その後二十二歳の頃、ある河畔を通つてゐた。柳が繁つて如何にも清爽な氣分に満ちてゐた。この美しい自然を眺めながら、自分もどうかして藝術の力で如此美を表現してみたい。然し果して自分が藝術家になりうるであらうか。其自信がまだ出來てゐない。不安と焦燥とが彼を囚へた。その時ふと隱袋ポケットの中に手を入れると小刀ナイフがあつた。彼は、其小刀を河中に投げ込んで、若しそれが水中に沈むところが見えなければ自分は藝術家

になる事が出来る。若し見えなかつたならば其資格は無いのである。この運だめしをする慾望が強く彼を誘惑した。そして、思ひ切つて小刀を投げてみた。すると、水煙が立つた。然し沈むところは見えなかつた。吉か凶か、頗る疑はしい結果になつたのである。ゲエテは大分悲觀して、しばらくは沈鬱な氣分に捉はれてゐたと云ふ。かく、彼は少年時代から青年期へかけても一種の宿命観を懷いてゐたのである。八十歳になつた千八百廿九年の談話にもこの考へが述べられてゐる。所謂「惡魔的ニツシュ」のものに牽かれる心である。彼がエツケルマンに云ふには、人間は豪オウくなるに從て益々一種惡魔的な力を信ずるやうになる。何とも分らない、何とも云へない力がこの宇宙に作用はたらいてゐる。人間は之をどうする事も出來ず、又説明する事も出來ない。人間にもこの不思議な魅力を持つてゐるものがある。奈翁の如きは其一人である。波得大帝、フリードリヒ大帝の如きもさうである。藝術家の中では畫家よりも音樂家にこの種の人物が多い。例へばバガニイニイの如きがそれである。メフイ

ストフエーレスは餘りに消極的な精靈で、所謂「惡魔的」の力はもつと積極的、能動的の實行力となつて現はれるのである。宗教の方面で屢々詐欺師、山師と罵られるやうな人物にこの力が潜んでゐることがある。何と云はれても、群衆は其魅力に引ずられて行くのである。

ゲエテを圍繞する多くの女性の中最も多くこの力を持つてゐたのはリリーである。その不思議なる魔力から遁がれようとしてゲエテは伊太利へ志し、アルプスの高峯ゴットハルトの絶頂に着いた。ゲエテが二十六歳の初夏六月二十一日の事であつた。然し途中でもリリーの事がどうしても忘れられない。明日は恰も彼女の誕生日である。ふと胸を見ると金の心臟形のメダルが下がつてゐる。リリーの贈物である。ゲエテはそれを見ると思はずそれに接吻して、急いで再び歸路に就いたのであつた。ゲエテは當時を追想して、全く一種不可抗の力に左右せられたのだと云つてゐる。最後に終焉の一年前八十二歳になつたゲエテは、この「惡魔的」のものに

對する吾々の態度に就て語つてゐる。成程不可抗の力ではあるが、吾々は出来るだけの努力を惜んではならぬ。それは恰も佛蘭西人がコヂイユ (Cotille) と呼ぶ遊戯の場合と同様である。投げられた骰子で勝敗が決せられるとは云へ、なほ石を巧みに按配することは當事者の手腕に依るのである云々。即、「ファウスト」に現はれた「人事を盡して天命を俟つ」といふ悟に達したのである。

却説、浪漫派の運命觀を説く前に中世期を一瞥せねばならない。中世になると基督教の思想に基いて贖罪觀念が著しく現はれ、宿命を以て過去の業の應報と見るか或は信仰の確立をためす神の「試み」と見てゐる。例へばハルトマン・フォン・アウエの書いた「石上のグレゴリウス」は、兄妹の不倫の戀から生れた罪の子で、親の罪業を償ふため十七年間絶海の巖の上に難業苦業し、終にこの世で「最も淨き者」となつて法王の位に上るのである。そして、聖書の約百記や、かのハウプトマンも取扱つてゐる「憐れなるハインリヒ」の傳説の如きは神の試鍊といふ觀念に基いてゐる。

る。所謂「天刑病」なるものは過去の罪惡の應報か、又は神から負はせられた十字架と見られてゐる。一般に宿命觀念と懺悔奉仕の心とが結び付けられてゐるのである。

## 四

次に獨逸浪漫派の運命觀を見ると、この派の傾向として凡てが中世への憧憬から生れてゐるが、基督教的思想よりも寧ろ神秘主義に親しみ、其「運命」なるものは、惡意ある、執拗な、偶然ツリフケと見られてゐる。それは暗黒な迷信の世界である。殘忍性と妖怪氣分に富んでゐる。浪漫派の運命悲劇なるものにはシルレルの「メツシナの花嫁」の影響が多いと云はれてゐるが、其運命觀は極めて外面的で、何等の悲壯美も無く、唯戰慄と嫌厭の情を惹起するばかりである。一例としてヴェルネルの「二月廿四日」を擧げる。子が父と争つて鎌を投げ付けると、父は驚きの餘り卒倒して死んだ。それが二月廿四日であつた。この日に恐ろしい呪咀が纏はるのである。子

は親になつた。七才の男兒と二才の女兒とがある。二人の幼兒は「鶏殺し」の遊びをしてゐた。「お前鶏になれ」と云つて七才の兄がかの呪ひの刃物を持って妹を切り殺した。二月廿四日の事である。この子には生れながら赤い鎌の形をした痣があつた。妹を殺した罪の意識が彼を放浪の旅へ導いた。それから二十年経つた。多額の金を贏ち得て彼は久振りに父の家へ歸つて來た。處は瑞西の山中で、劇しい吹雪の夜である。それとは名乗らずに一夜の宿を乞うた彼は翌朝老いたる人々を喜ばさうと思ふのであつた。家の主人はふと奥の間の旅人の持つてゐる金の事を思つた。亡父の呪に責め苛まれ家運が日に傾き、煩悶の日を送つてゐる彼は圖らず盜心を起こしたのである。風も無いのに壁に懸けてある鎌がばたりと落ちた。それを拾ひ上げて終に旅人を殺害し、其持金を奪ひ取るのである。二月廿四日の出來事である。旅行券と腕の痣が殺された者の素性を語つた。狂氣のやうになつた彼は自首して處刑を受け、あの世で神の審判を受けようと決心する。この劇は一時非常に評判になり、之

を模倣した幾多の所謂運命悲劇が生れた。然し、この運命観は極めて皮相的である。「日」とか「武器」とかいふものに悪運が宿るものと考へるのは云ふ迄も無く淺薄である。「効果」<sup>エフ・エクト</sup>の外には何物も無い。間も無く其聲價を失墜したのは怪しむに足りない。

## 五

近代文學に移つて、まづ近代社會劇の祖とも稱すべきイブセンの運命観を見よ。イブセンは希臘の運命思想を内面化して、近世科學思想と調和し得るやうにした。所謂「遺傳の悲劇」なるものがそれである。「神託」といふやうな外的の力を棄て、親から子へ、子から孫へと血肉の内に侵入して傳はつて行く恐ろしい遺傳の力とした。考へて見るとこの遺傳の事實ほど戰慄すべきものは無い。吾々の誇りとする意志の自由もどれほど遺傳的素質に於て制限せられてゐるか分らない。「幽霊」の持つ恐怖と魅力とはこの意識から生れて來るのである。貴賤貧富の差を「運命」だ

と人は云ふが、それは外面的のものである。素質は肉と魂とに搦まるゝもので如何ともする事が出来ない場合がある。「こんな生命はいらないから貴女に返へしてあげ。受取つて下さい。」といふオスワルドの言葉は永久に吾々の胸に響くであらう。イセブンの外ヘツベル、アンツェングルーベル等もこの問題を取扱ひ、現代に於てはハウプトマンの「日の出前」、「平和祭」等があり、最近表現派の作家も亦この題材を用ゐてゐるのに依ても如何に痛切な問題であるかゞわかる。

メエテルリンクに於ては運命の力が主として「死」の形を取て現はれてゐる。「内部」、「侵入者」、「群盲」等はこの方面に於ける代表作である。又好んで「鍵」とか「指環」とかいふものを用ゐて前世、現世、來世の運命を象徴してゐる。露西亞ではアンドレイエフの如きも宿命論者である。「人の一生」、「アナテエマ」などを見るとそれがわかる。更に一種沈鬱な氣分を持つてゐる奥國の作家ホフマンスタアル、シュニツレルの如きも宿命論者の中に數へらる可きであらう。ホフマンスタアルが好て



希臘悲劇の改作を試るのも首肯される。シユニツツレルにはメエテルリンク流の「死」の觀念が鮮かに現はれてゐると同時に、その一幕物「短劍を持ちたる女」には「前世の宿業」といふ思想が見える。ニイチエの「ツアラトウストラ」に於ける輪廻説を思はせるやうなものである。宿命の觀念は結局こゝに到達すべきであらう。現代の日本では故國木田獨歩の「運命論者」の一篇が最も端的に宿命思想を語つてゐる。

最後に、現今の文藝と宿命觀との關係を一言して結論とする。即ち、表現主義の立場と宿命觀念との關係である。表現主義は印象主義の反動として、外界の支配を脱却して再び自我を恢復し、自由意志の權威を發揮しようとする運動である。従て固定的の宿命觀とは到底一致し難いのである。人間は自我の中に宇宙意志を宿さねばならぬ。自己の道を拓く事が、即ちまた宇宙の道を開拓する事になる。自己の運命と宇宙の運命とは切り離す事が出来ない。吾々は宇宙と共に創造し進化して行くので

ある。云はゞ宇宙の運命を造つて行かなくてはならない。無論、數かぎりない意志と力とが發動し、互に相交錯するから、所謂「偶然」的事故は避け得られないが、吾々は最早小さい吾々ではなく、宇宙意志そのものゝ一部分であり、宇宙の運命を創りつゝあるのである。この立場からすれば固定的運命觀は到底成立し得ない。若し新たに運命觀が生れるとすればそれは著しく内面的、神秘的のものであらねばならぬ。

## ヴェデキンドの詩と小説

## 一

「春の眼ざめ」や「出發前半時間」や又は「地精」などの作で我文壇に紹介せられたヴェデキンドは元來戯曲家であつて詩や小説の作は澤山は無いが、彼の思想を知るにはこの方面も視ふ必要があると思ふから、茲には主として其の紹介を試みることにした。彼の詩と短篇小説とはもと「公爵夫人ルツサルカ」(一八九七年)と題する書物に併はせて載せられたが、後に各々獨立して、詩集は「四季」(Vier Jahreszeiten)と題し小説集は「烟火」(Feuerwerk)と題して出版せられた。皆一八九〇年から一九〇〇年迄の作で、この時期が藝術家としての彼の頂點であつて、かの傑作と云はれる「春の眼ざめ」や「地精」も出て居るが、それから以後の彼は寧ろ降り

坂で、今後も殆ど見込が無い、役者となつて舞臺に現はれるのはよく自分を知るものだと云ふやうな評があつた。バツプの如きも Hoffmanstahl は今後大戯曲を書くかどうか少くとも疑問の存する餘地があるが、ヴェデキンドに至つては先づ安心して否定することが出来ると云つてゐる。然しこの批評の當否は自ら別問題になる。さて近頃出版せられた彼の全集六卷の内第一卷の「敘情詩及散文」といふのに「不思議の石」(Stein der Weisen)と云ふ韻文劇と共に「四季」、「烟火」及小説「ミネ・ハン」(Mine-Haha)と云ふのが収められてゐる。

それで私はこの詩人の特徴を「性慾の描寫及讚美」、「美の憧憬」、「超人的思想」、「譏諷及自嘲」といふやうに考へてゐるが、戯曲は勿論詩や小説にもそれが現はれてゐるやうに思ふ。勿論これ等の要素は或は別々になつて現はれてゐることもあるが、又一の作や一の性格に混合してゐることもある。殊に超人的ユールマンシュリヒ或は英雄的小説ヘロイックシユといふやうな方面は大抵強い性慾に伴つて出て来るやうに思はれる。そしてこの性慾的エロティックシユ

といふ方面が矢張彼の作では最も著しい特徴であつて、詩凡そ百篇、短篇小説九篇の大部分は性慾に關することである。詩の中から一つ二つ抜いてみよう。

地 精 (Erdgeist)

勇ましく罪を掴め

罪より歡樂を生るゝ

汝は萬事を知り盡さんとする  
幼兒をさなごに似たり。

地の寶を避くることなかれ

在る物は皆取るべし

世の掟はたゞ人が

踏み躪るためにこそあれ。

足どり軽く新らしき墓の上を

笑みつゝ躍る者ぞ幸さいちある、

絞首臺の梯子の上に舞踏しつゝ

いまだ倦うみ困こじたる者はあらず。

戀の囁ささき (Lieb. santrag)

われ等をして火を弄もばしめよ

哮うり狂ふ愛の火を、

われらをして恐ろしき怪物の棲すむ

深き底を探らしめよ。

人の心の猛獸

ガエデキンドの詩と小説

毒蛇、虎豹、はたまた  
 貪婪の牙を鳴らして  
 死屍をすら犯す豺狼<sup>ヒエルク</sup>

これらの動物を驅り集め

逐ひ起て、嗾<sup>け</sup>し合はせ

さて四方の門を堅く鎖<sup>くさ</sup>して

王者のごとくわれらは樂まん。

この二篇と同じ思想が戯曲「地精」の序詞に現はれてゐる。即ち猛獸使ひが鞭を  
 持て舞臺に現はれて(この役を嘗てヴェデキ  
 ンド自身が演じた。)観客に向つて野獸と強い人間との格闘を見  
 せようかといふ意味のことを述べる。強い戀、男性と女性との熱烈深刻なる争闘。

寧ろ噛み合ひといふやうなものが彼の戯曲にはよく出て来る。女が勝つか、男が勝  
 つか、弱者の肉を強者がムシャ／＼喰ふといふやうな猛烈なものである、全く命が  
 けの闘ひである。「地精」では女が勝つが、「バンドラの筐」になると男が勝つ。「した  
 くかもの」(Mit allen Hunden sehtzt)でも女が勝つて、「海山千年」(In allen Wä  
 ern Gewaschen)に至るとやはり男に負けて仕舞ふ。ヴェデキンドは決して挑發的の筆  
 を用ゐてはゐない、挑發的以上である。讀者や看客は之に對して戰慄する外は無(時  
 時に哄笑すること  
 ともあらうが)。赤裸々の本能を突きつけ、情慾の烈火に焼け爛れたやうな世界を見  
 せつけようとするのである。「烟火」の巻頭にある「エグリスギルの火災」の如きも  
 それで、ヴェデキンドが少年時代を送つたといふ北瑞西の一州で或る放火犯人が自  
 分の犯罪の経路を懺悔する筋であるが、この強壯な百姓の若者がある女に依つて十  
 九歳の時始めて「春の眼ざめ」を経験すると、村の美しい娘は皆彼の物になつて仕  
 舞ふ。然しある時近隣の山へ葡萄摘みの手傳に行つたとき心易くなつた、松樹のや

うに瘦せた、小柄の、不思議の眼を持つた、氣位の高いシユワーベン生れの小間使に對しては彼の肉の力は萎え挫けて仕舞ふのである。彼女は泣きも笑もしなかつた。彼女はたゞ凍りついたやうに冷かであつた。

この七年間には時々牢屋の中でこの胸の苦しさに俺は吼えたこともあつた、石の上で蟲の様にのた打廻はつたこともあつた。さうすると奴等が来て目の目も見えず、空氣も通はないやうな處へ押し籠めたつが、けれどもさういふ時にはいつでも俺はあの晩のことを想ひ出しちやあ、どうでもするが可い、あの晩のやうな苦みは二度と再びあるもんぢやねえ。それを俺はすませて来たんだ。どうでもするが可い、あつて獨り言を云つてたよ。あの時誰かが俺を捉まへて、引括つて、腰掛の上へ乗せてぶん撲つたら、俺は一生涯そ奴に證を云つたらうに、生憎と俺一人きりで誰もあはさなかつた。俺は獸の様に吼えたり、唸つたりして山を越えて、森を抜けて逃げた。けれども駄目だ。火焰の様なものが俺の頭へおつかぶさつて来るやうで、そいつが後からく〜だん〜烈しくなつて来るんだ。何のこたあねえ、燃えてる家の中にゐるやうなものさ、逃げようたつて逃げられねえ。窓からも、戸口からも火焰が舞ひ込む。凍つてゐる筈の地面までが熱くなつて来た。俺は地團太を踏んで悪魔にでも追つかけられる様に逃げ出した。自分の情火に身を焼かれて夢中になつて村へ逃げ歸つた彼はふと風に梢が揺らぐ

のを見て電光の様に「放火」といふ念を起こした。そして五箇處に火を放つて再び戀人の處へ走り歸り――

マリ、開けて呉れ、火事だ！ あれが見えないか？ 空一面の火だ！ お、お、燃えるわ、燃えるわ！ エグリスキルが燃えるわ！ 俺がやつつけたんだ。どうだ見るあんなに明るい。マリ、五箇に火をつけたんだぞ！ 見る、見る！ どうだ、これでも俺は男ぢや無いか――

けれども女は氷の様であつた。そして男を放火犯人として引き渡した。村中の美しい娘を征服した男は終にこの傲慢な、冷かな、不思議な眼を持つた女に征服せられたのである。この本能的の男の告白の言葉には一種の力が籠つてゐる。ゼルゲルといふ評家はこの作を彼の小説集中の壓巻としてゐる。彼の小説の書き方は一體にモウバッサンに似てゐると云つたのも同じ人である。この他女性が男性に翻弄せられるといふ方面を歌つた詩には「克服」(Eroberung)、「ヴェンドラ」(Wendla)、「従順なる少女の歌」(Das Lied vom gehorsamen Mägdelein)、「ブリギッテ」(Brigitte B.)、「純

潔」(Die Keuschheit)等がある。かういふ詩の中には男に誘惑せられる女の運命を傷む心も無いではないが、寧ろ女の貞操に關する在來の思想の嘲笑、又はかの「春の眼ざめ」に現はれてゐるやうな道學者流に對する譏諷(「春の眼ざめ」の憐れな機、或は性もツエンドラといふ)、或は彼の所謂「牝狗」なる弱い女に對する侮蔑といふやうなものが現はれてゐる。中にも「純潔」と題する一篇は醜怪を極めたもので、無經驗な、所謂「純潔」なる少女が惡魔の毒牙に罹つて、言語に絶する侮辱を受けて、終には男に短銃を渡され、唯々として死に就くと云ふ筋を歌つたものである。これは又顛倒性色情の一種なる Masochismus を描いたものとも見られるが、同じ様な例は「死の舞踏」(Totentanz)といふ劇の中の一少女で、これは廢娼運動をやつてゐる婦人の家に奉公してゐる間にその婦人の寢室に忍び込んで、性慾や娼婦に關する書類や繪畫を偷み見たのが原因で、終に肉慾の苛責に堪へかね、自ら苦界に身を沈めて、出来るだけ強い苦痛の下に身を置かうとするのである。「犠牲」(Das Opferlamm)と云ふ小説もやはり同様

な筋でこれも境遇の悲劇ではあるが、病的現象では無く、作者は女主人公に同情してゐるやうに見える。即これはある娼婦の告白で、初戀の男に欺かれた苦痛を更に深刻な劇烈な苦痛の下に忘れようが爲めに自ら進んで苦界へ身を沈めるといふ筋である。この告白を聞いた客は願て深く自ら恥ぢた。「彼は前夜は教誨師の假面を蒙つて行つたが、今や恰も教誨師の説教を偷み聴いたやうな氣持がした。彼は全く思ひがけぬ處に純潔を發見した。彼はかの少女のことを考へると自分を侮蔑せざるを得なかつた。彼女は嘗て惡を欲したことなくして而かも非運に陥つた。自分は生涯に一度の善を欲したことなくしてしかも未だ全然破滅はしない。かう彼は感じた。この印象は一生彼の心に止まつた。」こゝにはツエデキンドの懷疑の方面が現はれてゐるが、娼婦といふものに就ての彼の考へも覗はれるのである。「死の舞踏」の主人公は肉慾の讚美者で、官能の快樂は天國の花である。自由なる「愛の市場」に強い女(牝狗に對して)が活動するのは自然の理法に合ふものであると云ひ、「海山千年」の女(牝虎と云ふ)

主人公は「肉を鬻ぐは職業にはあらず、妾の世界観なり。」と云つてゐるが、詩の方  
面でも「ルル」(Lulu)〔「地精」の女主  
人公と同名。〕とか「告白」(Konfession)とかいふのが同じ思想を歌  
つてゐる。

ルル (Lulu)

われは日常のゆきかひの  
小刻みの犬の歩みを好まず、  
怒り狂ふ大洋の  
逆捲く大浪を愛す。

わが愛する愛は嚴かなる技にして  
永遠の知識なり、

天の聖き恵にして  
地の偉なる力なり。

男よ、わが心の凡てを  
大なる靈の力もて充たせよ。  
さらば誇りと幸とに歡呼して  
汝の前に衣を脱がん。

告白 (Konfession)

懲罰の力ある全能者の前に立ちて  
快く、喜びて誓はん、  
名聲と幸福とに富める者たらんよりは

ヴェデキンドの詩と小説

いかに娼婦たりしことをわれは希ふかと！

世界よ、われに於て凡ての拘束を脱したる  
潔き女性一人失はれたり。

誰か愛の市場にわれの如くよく  
生れつきしものあらんや？

他の者がその手工に勤むが如くに  
われは誠實もて愛に身を委ぬるに非ずや？  
嘗てわれ一度なりともわが生に於て  
定まりたる人の子を愛したることありや？

愛か？ 否、そはこの世に幸福を齎さず。  
人を愛せばたゞ嫉妬と屈辱とを受けん。  
あまたゝび、熱く、強く愛せらるゝをこそ  
まことの生とも祝福ともいふべけれ。

「愛せらるゝは何たる幸ぞ！ 而て神々よ、愛するは何たる幸ぞや！」とゲエテは  
歌つたが、ヅエデキンドに云はせると一人の男を愛するが如きは牝狗の屬性であ  
る。あらゆる男に強く、烈しく愛せらるゝのが女性の受働的の勝利なのである。

二

次に、これはヒロイックといふ性質と関係があると思ふが、ヅエデキンドは厭生  
論者では無くて生の肯定者であるといふことである。これは既に「春の眼ざめ」の  
結末に於ても現はれてゐる。かの自殺したモーリッツが自分の首を抱へて墓から出



て来て友人のメルヒョールを幽冥界に誘ひ込まうとすると「覆面の紳士」が現はれてモーリッツを叱つてメルヒョールを生の方へ引き戻す。この覆面の紳士は運命又は空そのものと見るべきであらうが、「老求婚者」(Der Greise Freier)と云ふ小説(これは日本にも先年翻譯が出た)にも同じ思想が現はれてゐる。心臟病に罹つた女が美しい強壯な理想的の青年と相思の間になりながら、常に「耳の上まで禿坊主で、大きな、離れた木の葉形の耳を持った、短かい灰色の鬚の、極めて小さい、ちよつびりした鼻の」老人が自分の夫になると云ふ強迫觀念に襲はれて、病は漸々重くなり、終に死期に近づいた身を、妹の計らひで戀人と一夜の契をこめ、そのまゝ死んで仕舞ふといふ筋であるが、こゝには妹の口を藉りて明かにかの老人は死で、ルードルフといふ戀人は生であると云つてゐる。死と生との暗闘で、結局死が勝つたやうではあるが、犠牲なる女は一夜なりとも生の歡樂を十分に味はつて微笑しつゝ逝いたのであるから矢張生が凱歌をあげたともみられる。

## 三

次には肉體の適否は精神の適否と一致し、完全なる官能的快樂は禁慾よりも一步人を神に近づけるといふ思想で、これは小説「ラツビ・エスラ」(Rabbi Esra)や「一瞥の戀」(Die Liebe auf den ersten Blick)などに現はれてゐる。

ラツビ・エスラは猶太人で息子のモーゼスがある女と結婚しようといふのに對して自分の經驗話をする。そして互に官能の快樂を完全に味ひうる夫婦は精神上にも亦一致和合するといふ教訓を與へるのである。この小説は又聖書の文體で書かれてゐる點で異彩を放つてゐる。體格の偉大なエスラは初め肉慾の誘惑を恐れて、その保證を得んが爲めに瘦せた小さいレアといふ少女を娶つた。廉價な襟飾を求むるが如くに妻を求めた。それまで彼は「ヘブロンの露の如く」純潔であつたが、一度若き妻と棲むやうになつてから、嘗て窈かに肉體をラープザールの如く樂しましむるものと思つてゐた愛情は藥のやうに苦がいものであると悟つた。そしてその満足の後

には神に裁かれ、呪はれた者の如く、深夜思ひがけず出逢つた二人の盗人の如く、互に恐れ避けた。

モーゼスよ、われは楽しからざりき。主は知り給はん。われは衣の掛棒と語り、指の爪と語り得るが如く僅かにわがレアと語り得たり。妻の想ひはわが想ひならざりき、そはわが想ひはわが想ひにして、妻には想ひといふもの皆無なりければなり。かくてわれは孤獨に向ひぬ、孤獨はわがレアよりも多言なりき。またわれは自らかく云ひき、エストラよ、汝は袋に入れたる猫と、汝の頭の上の重荷を買ひぬ。——されどエストラよ、汝は袋に入れたる猫を買ひしことを知らしむることなかれ、女は飲水場みづのみばに行く羊仔ひつじの如く罪無ければなり。

かうして淋しい日を送つたが、二年の後に彼の妻は病死した。エストラは誘惑の保證を失つた落膽と悲嘆と不安の餘りに神を呪ひ、世を呪ひ、自己を呪つて、終にその悲痛を忘れんがために「砂漠の娘たち」のところへ行つた。そこで基督教徒の娘や猶太の娘やハムの娘を識つた。それ等の「リバノンの杉」のやうに生へた女達の中から彼は凡ての官能の力を鋭くして一人の女を撰び出した。この女の心は彼の心

の同胞で、その肉體は彼の肉體と雙生兒ふたごのやうであつた。このザラーといふ女をえてからは肉慾は最早罪惡では無くて、満足の度大なれば、愈々心喜び、愈々全能者に近づくやうな感があつた。そして結婚の夜にモーゼスが出來たのである。エストラはこの生きた貴重なる教訓を一子モーゼスに傳へようとするのである。即、若し人が神の指し給ふ道をしまば肉の愛は決して惡魔の崇拜では無い。何故なれば神は元來二人の人間を身心の二面から相合ふやうに造り給うたからである。

「一瞥の戀」の方はある會で逢つた名も知らぬ娘のところへ出かけて突然に求婚する男とその相手の富豪の娘との對話から出來てゐて、娘は初めの中は持參金をあてに男が求婚したと思つて相手にしないが、漸々男の説に心を動かされて終に結婚を承諾すると云ふ筋になつてゐる。この男に云はせると外的人格と内的人格との間には何等の差別も存在しない。今假りに吾々が暗夜、霧深い雨天などでもいゝが、ある男の後から歩いて行くとする。その男は長い外套に足のところまで裹まれてゐ

て、輪廓は少しも分らない。けれどもその際吾々にはその男全體を判断しうるやうな或物が必ず残つてゐる。——それはその男の「歩き方」である。そして人の「歩き方」は決して偶然のものでは無い。體格と密接の關係がある。人の歩き方には一種の律調リズムがあつて、これは言葉では説明が出来ない。唯感じ得るものである。少し練習すれば何人もこのリズムから容易に全體の體格を組み立てることが出来る、ルネッサンス式であるか、ロココ式であるか、又クラシカルの形か、世紀末フアン、ド、シエールのスタイルスタイルか的確に分かる。但その際注意すべきはその運動の線が耳朶から爪先まで均調の波をなしてゐるか或は腰の上で切れてゐるかと云ふ點である。若し切れておれば外套に皺が寄るから分かるが、かういふ人物は統一した性格を有せぬ「種の無い」人物である。かういふ人物に係り合ふと一生涯欺かれ通して酷い目に逢ふ。之に反して「種」ラッセを持つてゐる人物は身心に統一があつて一つの思想から造られた一種の藝術品である。かういふ統一した人間の歩調からは體格が分り、次にそれに該當した容

貌、殊に口と鼻が分つて来る。實際ある女の歩調からしてその女は獅子鼻か、曲り鼻か、又唇は厚いか薄いか分る。かうなるとその女は交際してみても果して自分を理解し自分を愛するか否やといふことが確實にわかる。勿論その女が皇女であるか女乞食であるか、女コックか金満家か、それは分らないが、内的又外的にどういふ性質の人間であるかは分る。——かうその男は主張してゐる。又この男の結婚觀ともいふべきものが面白いと思ふから稍本題を離れるが序でに紹介しておかう。

百姓は米櫃になる働きものを女房にする。怠け者は退屈凌ぎに女房を探す。詩人肌の男は「自分」を理解する女を娶る。どんな馬鹿でも、世間見ずでも、唯「自分」を理解さへすればいいのだ。即女房から全然レラチーヴの價値を求むるに過ぎない。唯自己の人格を高めようとするので、女房たるものは是非自分を崇拜しなければいけないのだ。これ等は總て第二流のエゴイストである。苟も女を女として知るもの、この世に於ける女の本來の面目を知るものは人生が生み得る最も壯麗なものを求めてわが物にしようとする。決して自分とレラチーヴの關係に立つ女を求めず、それ自身價値あるものを求める。——發育、華麗、偉大、大望、大なる感情、高度の幸福に堪へうる能力——かういふものを備へた女を得るものは

幸である——又多くの男は非常な幸福を察けないと云つて訴へるが、實は自分が萬一かゝる幸福に出逢つてもそれを感じうるには餘り小さ過ぎるといふことを知らないのである。世間には選り好んで醜婦を妻にする者がある。かういふ輩には美人は恐ろしいものに見えるのだ。

かう云つて彼は「控へ目の男」を罵倒してゐる。こゝにはヴェデキンドのヒロイツクの方面が出てゐるが、同時に一方には次に説かうとする「美の憧憬」といふ點に觸れてゐる。

## 四

「美」と「神聖」との結合を復興して、それを信仰あるものゝ偶像としようといふのが自分の獻身的事業であつたとヴェデキンドは「検閲」(Die Zensur)といふ戯曲の中で告白してゐるが、この思想を具體的に現はした作は戯曲の方では「ヒダルラ」(Hidalla)、一名「美の道德」(Die Moral der Schönheit)で、小説の方では「ミネ・ハハ」(Mine-Haha)一名「少女の體育に就て」といふ物語である。「ヒダルラ」の主人公は美しい男女を集めて、美しい優良人種を養成する會を起すが、終には狂人視

せられ、又曲馬の道化役に出て呉れと頼まれて首を縊つてしまふ。その説によれば美の渴望は世界苦克服の衝動と等しく神聖なる法則である。美を財産、身命より重んずれば一段神に近づく。従來の道德は貧者の爲めに作られ、疑も無く富者を除外するから狹隘である。美の道德は富者と強者との道德で、貧者懦夫は與らない。かういふ立場から美しい男女の間に愛の自由選擇を實行して、美しいジエネレーションを作り出さうといふ理想であつたが、それが悉く失敗に歸して仕舞ふのである。「ヒダルラ」といふ名は小説「ミネ・ハハ」の女主人公の名になつてゐるが、この小説は八十四歳の恩給つきの某老女教師の遺稿で、その女は死ぬ三四週間前ヴェデギンドの「春の眼ざめ」を讀んだが、自分も永年前に同じ様なものを書いたから見てくれとヴェデキンドに頼んで死んだ。下宿の四階から墜ちて死んだのであるが、自殺であるか否かは不明である。そこでヴェデキンドはこの物語を遺稿として出版することにした。「ミネ・ハハ」といふ名はある若い米人の説明によるとニーグロの言

葉で「笑ふ水」といふ意味であるさうだが、よく関係が分らぬから「一名少女の體育に就て」と自分が附け加へたと、かうヴェデキンドは書き添へてある。然し矢張ヴェデキンドの作たることは疑無からう。その死んだ女の生涯は數奇を極めたもので、南米ブラジリエンでニীগロの子供を教育したり、後には女學校の教師を勤めたと云ふ。兎も角大分空想的のもので、ヴェデキンドの母は米國桑港獨逸座の女優であつたさうだし、彼自身も曲馬師の一行に加はつて諸國を旅行したことがあり、その後俳優になつて諸國の劇場に出入してゐたから、それ等の見聞を集めて、一の理想的の女優養成所といふやうなものを想像してみたのではあるまいかと思はれる。

筋といふものは別に無い。少女の物心のつく頃から成熟期に至るまでの經驗を自叙體に書いたもので、その女優養成所とも云ふべき不思議な學校から未知の廣い世界へ送り出されるといふところて原稿が盡きて、全體は斷片に終つてゐる。その冒頭の一節が面白いから引いてみよう。

妾が今こゝに自分の傳記を書かうと決心したのは決して自分に文學者たる天職があるなどと感じたわけではありません。恐らくこの世の中で妾にとつて何が忌はしいと云つてブリューストツキングほど忌はしいものは無いと云へませう。愛を嚮いで生きてゆく女でも妾の眼には雜誌や書物などを書く程に墮落した女よりは高尚なものに映ります。唯妾の全生涯が外の女のそれと全く異つてゐるといふ事情が妾を動かしたのです。妾がこれ迄も度々人に話した事ですが、妾が死んで仕舞へば誰も最早口にする人も無からうと思ひますので書くことにしたのです。妾は唯この一つの書物だけ書くのです。――

追憶は遠く二歳の時まで溯るが、極く幼少の時には冬といふものは世界に無かつたやうである。いつても繁つた緑の葉蔭から太陽が輝いてゐた。緑は彼女にとつて幸福の色であつて希望の色では無い。希望を懐くには彼女は既に餘りに老いた。――それから初めて靴を穿いた時の心地などを描いてゐるが、彼女の居る處は森や牧場の間を清い小川が流れてゐる廣い公園のやうなところで、そこに寄宿舎風の建物が三十もあつて、その各に十四五歳を頭に三十名乃至八九名の白衣の少女が居る。別に「白グレース、ワイセ、ハウス館」といふ建物があつて、そこで音楽や舞踏の稽古があり、外に附屬の

試演劇場があつて、そこへは地下の電車て市から観客が来るやうになつてゐる。女主人公のヒダラはこの全く外界と絶縁せられた處に七年間を送り、いよいよかの生理上の一大變化が來て、體が著しく肉づいて来るやうになつた時、他の同じ事情の下にある少女達と共に外界へ送り出されるのである。

少女の體育法には一定の順序があつて、それが嚴重に勵行せられる。そして兵營の様に古參の者が代り合つて新入者を教育するやうな制度になつてゐる。極く少さい時には水泳、駢足、繩飛等の練習をして、漸々逆立ち、玉乗り、舞踏、音樂といふ様に進んでゆく、そしてある試験に合格すると試演場へ行つてオペラ・コミックのやうな物を演ずるといふ順序である。要するに極めて釣合を得た、<sup>エラスチック</sup>弾力性の肉體を養成し、同時にあらゆる美育を授けるやうになつてゐる。そして規律は極めて嚴肅で、教育法は鞭を持つてなされる。然し一方に世間の知識は皆無與へない。全く無知の状態に止めて置く。知識は禁園の果實である。Hidalla, Wera, Blanka, Lora, Hei-

di, Thelka, Betty などと様々の名の、様々の容貌體格の少女が居るが精神上には全く區別が無く一様に無知である。唯舞踏と音樂とに生きてゐる。そしていよいよかの變化が來ると此處を去らなければならない。始めは男の兒もゐるが、これはいつか見えなくなつて仕舞ふ。男子部といふやうなものが別にあるらしく思はれる。又こゝに集まつた少女は悉く美しい者ばかりだが、食事の世話や、掃除などをする極めて醜い老婆が二人ゐる。この中の一人は幼い時に他の少女のベッドへ忍んで行つた爲めに、又他の一人は窈かに墻を越えて遁げようとした爲めに、終生このバルクを出ることを禁ぜられ一生奴隷となつて醜く老いるのである。「隠れて愛するものは生涯奴隷に宣告せられる」といふのはヴェデキンドのある戯曲に出て来る言葉である。さてこの教育法がかくの如く外界の知識を絶対に與へないといふのが一方にはこの女主人公を不幸に陥れる原因になつたのであつて、この點に憤るところがあつて彼女はこの書物を書き出したのである。

次にこの教育法で出来上つた模範的の少女ゲルツルド (Gertrud) と「白館」の舞踏教師たるジムバ (Simba) を紹介しておかう。——ゲルツルドは十八九歳の美しい少女である。歩む時に彼女の體は重量の感を起さしめない。唯形が在る。その形すらも運動の美の爲めに殆ど忘れられようとする。彼女が兩脚を密接して直立するとき二つの踝の間には僅かの隙を生ずるばかりである。その姿勢を後ろから見ると、肉づきの好い腓ヒラを持つてゐるに係らず、踵から膝窩まで二本の垂直の線が描かれてゐる。そしてこの腓が漸々細くなつてゆく有様は譬へやうもない美しさである。細い足は美しい肉體全部を支ふるに堪へないやうに見える。實際體を支へるものは寧ろ腿の力と彼女の弾力性である。腰は眼立つほど太くは無い。上體は腰から獨立して、別の生物のやうにすらりと延びてゐて、兩腕は豊麗な點で兩脚に譲らない。全體が美しく、容貌も優しく、エキスプレッシヴであるが、殊にその足は自然の傑作である。

さてジムバは丈高く、絲のやうに細そりしてゐるが、體中の何處にも肋骨や腿の痕が見えない。ぐつたりした四肢の甘い倦怠さ、胴の柔軟さ、肉體の運動の微妙な表情、觀てゐると恍然として酔ふやうな心地になる。その豊かな、うね／＼と波を打つ、濡鳥のやうな黒髪を額こめかみの上に長く垂らして、頸筋のところて太く結んでゐる。眉毛は長く蛇のやうで、美しい、美しい鼻をもつてゐる。その唇に浮ぶ、いとも悲しく、いとも甘い微笑はこの世の外のものである。又この女の口からは折々火ザラマンブル蛇のやうな舌の尖が閃めく。狭い細い胸と、美しい兩肩を深緑色の大粒の玻璃眞珠の網襦袢で緊しく裹んでゐるが、兩つの乳房は兩つの大きい環に縁どられてあからさまに露はれてゐる。その周りの眞珠は一きは大きい。兩脚には白絹の編織トリコを穿き、その上に腰から股の中程まで明るい雑色の土耳其絹の半袴はんばんを着けてゐる。それには黄と紅と白との垂直の條が入つてゐて、斜縞のある、脹らんだ帯のところまで胴を裹むが、下へ向けて眞直に切り開かれてゐるので、細そりした眞白な脚は自由に露

はれる。足には柔かい、低い、廣く切り開かれた黒い靴を穿いてゐる。これらすべてのものゝ上に紅く笹縁を取つた帯黄色の毛織の外套を纏つてゐる。その前面は裾まで開けておくが、たゞ腰の上のところを扣子しゅがねで緊しく締めてある。頸筋のところから帯の上まで細く鋭く断ち切り、兩袖は肩の上から下へ向けて鋭く切り裂き、卵色の美しい腕との配合とがはせに紅い裏を付けてある。そしてこの女が兩腕を高く上げるとき腋の下から黒褐色の濃い毛の房が二つ露はれる。――

## 五

最後にヴェデキンドの譏諷と自嘲の方面を簡単に述べようとおもふ。この諷刺嘲笑の風は實に彼の長處であつて又彼の病弊である。ある評家が彼を最上の悲喜劇家トラギコメディクと云つたのは當つてゐる。彼には確かにフォームルがあるけれども、そのフォームルは動ともすると惡辣、卑猥のものになつて作品全體のトーンを攪亂する虞がある。この點は彼自身も十分自覺してゐて、議論や作物の上で屢々辯護を試みてゐる。自分

の態度は決して不眞面目な、滑稽的のもので無く、極めて嚴肅なものである。自分は道德家モラリストであると聲言してゐる。如何に嚴肅な態度を取つても理解の無い世間は之を滑稽視して仕舞ふ。「ヒダラル」の主人公の運命はそれである。又「人生此の如し」(So ist das Leben)と云ふ劇の主人公は最も深刻なる悲劇を演じつゝ哄笑を以て迎へられる。「人生此の如し」と観ずるのは實にヴェデキンドその人なのである。又「バンドラの筐」の中にも或人物を藉り來つて無知なる世間の嘲笑を具象化してゐる。「検閲」は最も露骨に自家辯護を試みたものである。然しながら果して彼の態度は彼の主張するが如くに嚴肅のものであるか。彼自身と雖も危まざるをえない。それは彼の劇「不思議な石」を讀むと分かる。劇の主人公なる魔法師は自分の使ふ「フォームル」の爲めに自分の武器で射殺されて仕舞ふのである。フォームルの歌ふ歌は卑猥輕佻なものである。彼は只腹の皮を繕らせるだけの能力を有つてゐる。彼は Zwercherfellschüttler である。自分と正反對の現象である。それに彼は武器を奪はれ、靈石は



へ取り去られて、その射る矢の下に斃れる。彼は云はゞ自殺したのである。彼の誇としてゐた「フォームル」は彼の死敵だつたのである。

彼の滑稽が如何なるものであるかは、例に依て裸體の女を描いた惡辣を極めた「種痘」(Die Schutzimpfung)といふ小説や、次の詩などを見ても察せられるだらう。

牛飼男と牛飼女(牧謠調)

森の奥に牝熊が一疋棲んでゐる

牡熊も一疋棲んでゐる

いんまに森には

子熊がどつさり殖えるだらう。

さてオリブにや神様がござる

中にヴェヌスとアポロもござる。

こゝはいつでも上天氣

どの神さまも上機嫌。

裏の畑に泥いちり

おさん可哀や泣いてゐる、

けれども元氣な愛神クビドはそばに

せゝら笑つて坐つてゐる。

こゝへ來かゝる權助は

牝牛と牡牛で鋤を牽く、

牛より先きに牽かねばならぬ、

すると仕事の捗がゆく。

時分はよしと愛神は

弓に矢番へおさんの胸を、

まだわけ知らぬおさんの胸を、

肌衣の上からふつと射る。

それとみるより權助が

おさん助けに飛んてくる、

飛んてくるのを二の矢を番へ、

おさんもろとも射て倒す。

そこでおさんと權助が

顔見合はせて呆れ顔、

それから二人がどうしたか、

口ぢや云へない、お察しなされ。

又彼の自嘲的態度は「道化役者」(Bajazzo)といふ詩にも現はれてゐる。これは作者が「人生此の如し」の中から抜いたもので、「移り氣の運命の心は誰にも分らない。自分は唯驚くばかりで、泣くことも笑ふことも出来ぬ。いつそ人間は毎日筋斗返へりでもしてゐるのがいゝのだらう。手足が利く中は不幸も幸福にかはるものだ。」といふ意味を歌つてゐる。又「貨幣」(Der Taler)といふ詩では「錢は美だ。錢さへあれば好きな亭主も持てる。」と云ふやうなことを述べてゐる。日記體の小説「退屈」(Ich langweile mich)、「市場に」(Bei den Hallen)にも彼の棄鉢の態度が現はれて

ある。人生が退屈であるといふことは劇の方にも見えてゐる。ある男は退屈の餘り睡眠中に死ぬ虞があると云つてベッドの中へ硝子粉を撒いたといふ話である。ヴェデキンドは無事平凡を忌み、常に奇抜な、痛快なことを求めてゐる。彼の作にエキゾチックの分子が豊かなのもその結果であらう。然しこの奇抜な思想の大建築も多くは鋭い自嘲の斧で無残に破壊せられる。美的生活の鼓吹も、肉慾の崇拜も、ニーチエの影響の著しい超人的思想も、概ね皆幻滅と自嘲とに終つてゐる。「肉を齧ぐは妾の世界觀なり」と云つた女の飽く無き慾望は醫師の説によれば慢性消化不良の結果であつた。「美の道德」の主張者も終に「侏儒の巨人」に過ぎなかつたのである。

最後に少しく奇異の感を起させるのは彼の詩の中にハイネを想はせるやうなり、カルの調子を聞くことである。例へば「郷愁」(Heimweh)と題する詩などがそれである。

## 郷愁

苔蒼き石の上に

音たてゝ泉ぞおつる、

月かげにきらめきて

銀のごとく輝けり。

おもひ沈みつゝ我は坐せり。

泡だつ波を眺め、

過ぎ去りし昔をしのび、

來るべき日を夢みぬ。

浪の底深く

ヴェデキンドの詩と小説

さまざまの物こそ映れ、  
わが方を顧盼かへりみしつゝ、  
過ぎゆく姿。

みなかつてわが戀なりき  
過ぎ去りし喜びなりき、  
今この寂寞に  
わが心の憧がれ求むる。

.....  
この他「汝は百合の如く美はし」や「美しき羊飼ひの女よ」等がある。又稀に敬  
虔の情の閃きも見える。

然しグエデキンドのこれ等のアスペクトのどれが、又どこまでが眞面目なのか殆  
ど解し難い。それでも詩や小説は初期の作だけに概して主張的態度がみえるが、後  
期の戯曲に至ると殊に譏諷、自嘲の風が著しく、殆ど捕捉し難いやうな感を與へる。  
従て彼は矛盾の詩人、懷疑家、獨逸文壇の謎と云はれてゐる。私は今敢てこの謎を  
解かうとするものではない。私にとつて彼はまだ依然未知數である。唯彼は案外眞  
面目に煩悶してゐる一種の「力クラフトマンの人」であるやうに見える。唯其力が未だ十分で  
無い爲めに到る處破綻を示してゐる。彼の言葉を藉りて云へば彼は一個の「侏儒の  
巨人」(Zwergriese)である。

## 女性我観

## 一

社會運動に結び付いた女性問題を論ずる資格も意圖も私は持つてゐない。又性慾問題として女性を取扱ふことも私の目的ではない。唯漠然と「女性」といふものを前に置いて私は自分の考へを述べてみたい。

女性を「謎」と見るのは異性の立場からする神ミステイクエーション秘シ化カに過ぎないのであらうか。或は又女性それ自身不可解のものだらうか。思ふに、女性は「自然」が謎であるのと同じ意味に於て一の謎である。此場合私は主として「自然現象」を考へる。陰晴常の無い天候を思ひ浮べる。吾人の理性乃至悟性を超越した諸々の現象を想像する。「女性ロジックは獨特の論理」を持つといふ事が此比較の基礎となる。女性の心の動き方が不可

思議なのである。心それ自身は寧ろ極めて單純なやうに思はれる。心の諸要素の結合の方法が神秘的なのであつて要素それ自身は決して複雑ではない。

更に女性は「化粧」することに依つて、美しい「衣裳」を着けることに依つて自己を神秘化する。それは「羞恥」の心と等しく、自己保存及自己主張の本能から生れる必然の現象であらう。

美しく咲き、芳ばしく匂ふ事に依つてのみ花は蜜蜂を誘ふ。厚き衣を幾重にも纏ふ事に依つて蓑蟲は小鳥の鋭き眼から免がれるのである。

始めて女性に接近するものは先づ其粉黛と衣裝とに眩惑せられる。女性を識ると云ふ者は往々却て自己の論理に謬られる。この意味に於て女性はゲエテの云ふが如く「吾人が金の林檎を盛る銀の皿」である。然し、一方には又、眞に高貴なるものは常に單純である。女性はその單純なるが故に屢々光輝を放つ。日光の映照に依つて無數の色彩を現出するが、眞珠の美は其玲瓏たる純一性にある。單純から複雑へ

進み、更に大なる單純に歸るのが人類進化の理想だとすれば、女性に依て救済解脱を求めるとも自然であり、一方に女性を本能の權化と見るのも亦敢て怪しむに足りない。

## 二

ゲエテの所謂「久遠の女性」は犧牲的愛の發現に外ならない。男性に依て「努力」を示し、女性に於て「愛」を象り、努力するものは終に愛に依て救はるゝといふ思想を根本觀念としたのは有名な「ファウスト」である。戯曲「イフイゲニー」は至純なる女性に依て人類の罪過が贖はれる事を示してゐる。

「久遠の女性」なる言葉で現はされる「女性に依ての救済」の思想は中世に於ける「聖母崇拜」の形で其高調に達し、騎士制度に於て其華を開いてゐる。吾人は所謂「戀愛詩人」の詩歌の中に其俤を髣髴することが出来る。この女性崇拜の態度をエーヴァルトは「ダンテの愛」と稱して、女性の個性を破壊し壓服しようとする「クライ

ストの愛」と區別してゐる。

男性は各時期に於て自己の憧憬を女性の姿に寓すると云ふのも亦「久遠の女性」に對する渴仰を語るものである。一の女性から他の女性へと蜜を求める蝶の様に飛び移る「ドン・ホアン」的傾向も之を靈的に考へれば、「心の故郷」を求めて得ない人の悩みとも見られる。

「久遠の女性」の思想は女性の獻身的愛の媒介に依つて神の慈悲に縋る心である。故に一の他方信仰である。「ファウスト」は之に「努力」の契機を結び付ける事に依て自力他力の二門を融合せしめたものと見られる。この「救済」といふ宗教的觀念を一般化すると「女性に依る淨化」の思想になる。

吾々が「自然」の懐ころに抱かれる事に依て諸々の汚濁と煩惱を洗ひ淨めるやうに、純潔な女性の愛の光を浴びて心の塵を拭ひ落すことが出来る。それは恰も澄んだ泉に浸るやうなものである。淨化せられ鼓舞せられて吾々は新生の力を得る。屢々

「自然への避難」に依て「甘き平和」を恢復したゲエテにとつては、自然と神と女性とは三位一體であつた。

藝術家は屢その創造の力を清き女性の胸から汲む。彼は彼の所有する凡てのものを彼女に與へる、彼女は之を醇化して彼に返す。この時「愛は與ふ」と云つても、又「愛は奪ふ」と云つても結局同一である。

女神として、天使としての女性の他面には悪魔として、誘惑の蛇としての女性がある。本能に生きる無知な、弱くして而も片意地な女性がある。暫らく女性諷刺家の言葉に聽かう。

## 三

「女は生存する爲に幻影イリュージョンを缺くことが出来ない、全然幻滅の女は、屢々それを意識することなしに自殺する。女は「真理」に堪へ得ないのだ。真理はコルセットもキユ・ド・パリも着けてゐない。云ふも恐ろしい事だが真理は眞裸である。女は眞理の

ために赤面する。」(シエル)

「弱き者よ、汝の名は女なり。」(沙翁)

「女よ、汝は奴隷であるか。然らば汝は「友人」であることは出来ない。汝は暴君であるか。然らば「友人」を持つ事は出来ない。あまり永い間女性の中に「奴隷」と暴君」とが潜んでゐた。だから女性はまだ「友情」を持つ能力が無い。唯「戀愛」を知つてゐるだけだ。女はまだ猫か鳥だ、最もよくて牝牛だ。」(ニイチエ)

「若し女が男性的の長所を持つてゐたら、こつちで逃げ出したくなる。若し少しも男性的長所が無ければむかふて逃げて行く。」(ニイチエ)

「眞面目くさつた女は七つの錠をちろした空の行李である。」(ビヨルネ)

「人は女を深いものと思ふ。何故か。底が知れないからだ。女は淺薄とさへも云へなうものだ。」(ニイチエ)

「蠟燭の心を摘むのと女に道理を云つて聞かせるのと孰らが嫌な仕事だか分らない。

始終同じ仕事を繰り返さねばならず、氣短にすれば、小さい火を消して仕舞ふ。」(ピョルネ)

「女の片意地は不思議な防備が施してある。壕は城壁の後に在る。最難關を乗り越てやれ安心と思ふと、豈圖らんや、一番厄介な奴がまだ控へてゐる。」

「女を美的の性と云ふよりも非審美的の性と云ふ方が寧ろ當然だ。音楽にも詩文にも造形美術にも彼等は其の理解や感受性を持つてゐない。それは男に氣に入るための猿真似に過ぎない。それが證據には音樂會や歌劇や演劇に際して彼等の注意の方向を見るが宜い。大傑作の一番美しい箇所て無邪氣に平然と饒舌を續ける彼等の様子を見るが宜い。」(ショーペンハウエル)

## 四

女性崇拜の態度と、この女性侮蔑のそれとの間に何等かの共通點があるのであらうか。若し有りとするればそれは何か。私の見るところに依ると、この見方の相違は

結局「自然」そのものゝ見方の差異に歸着する。

自然を「本能」と見るとき女性は「美しき獣」となり、自然を「愛の力」と見るとき女性は「聖母」の姿を現ずる。要するに女性は男性に比して自然に近い。それだけ理知に遠いものである。性の動き方は全的である。一の極端から他の極端へ飛び移る。「女だから極端まで行くだらう。」とイブセンは「幽霊」のアルゲンダ夫人を評した。ピョルネの云ふ様に「女性に於ては何處て天使が終つて、何處から惡魔が始まるか見當がつかない」のである。要するに主情的なのが女性の特質と云ふ事が出来る。知慧の果實を味はつた男性は一般に理知的で左顧右眄して進む。従つて往々妥協的になり、因襲に拘泥し易い。女性は極端に盲從的であるか、或は極端に革命的である。「人形の家」のノラ、「ロスマルスホルム」のレベツカの如きは其適例である。神か獸か。奴隸か暴君か。女性は常に兩極端の一つに居なければならぬのであらうか。「人間」たり、「自由人」たることは不可能なのであらうか。思ふにワイニン



ゲルの云ふ様に今日に於て純粹な男女の典型を求めることは出来ない。皆雜種である。

生理的にも之を立證することが出来る。精神的にもそれが現はれてゐる、男性の中に多くの女性的要素が在り、女性の中にも多くの男性が潜んでゐる。現代は多くの感傷的の男性を生み、現代女性は理智的、意志的にならうと努力してゐる。女性解放の聲は女性の「男性化」乃至「人間化」を意味する。

## 五

オットー・ワイニゲルは其著「グシユレヒト、ウインドカクテナル兩性と性格」の中に女性解放の問題を論じてゐる。まづ「髪長ければ知短し」といふ俚言を引いて、解放を求めるのは畢竟女性の中の「男」であつて、女性解放の唯一最大の敵は「女」だと斷じてゐる。即ち彼の見るところに依ると「男」は理性的であり、「女」は飽迄本能的である。本能的の女性が性的に進まうとするのは其本性と矛盾するもので、即ちそれは女性の中に混入して

來た「男」の要素が自己を主張するのである。

従つて女性解放の理想を實現する爲めに女性は全然自己の中の「女」を殺さねばならぬ。彼女は男性乃至中性とならなければならぬ。著者は歴史上天才的女性と呼ばれる人々を擧げて概ね皆男性的傾向を持つてゐたことを指摘してゐる。

希臘の女詩人「サッフオー」は同性愛の元祖であり、佛の閨秀小説家「ジョージ・サン」は最も女性的なる藝術家ミュツセー及シヨパンを戀人とし、伊太利の女詩人「ヴィットリヤ・コロンナ」は同性愛の傾向を持つたミケランジェロと親交があつた。又文名を「ダニエル・スタアン」と稱した佛蘭西の女流作家は女性的の音楽家リストを戀人に持つた。

かういふ例が他に多くある。そして女性解放の運動も概して男性が女性化した時代に多く、週期的に現はれてゐる。第十、第十五、第十六、第十九、第二十世紀等である。決して新らしい運動ではない。結局一進一退して一箇所に低徊してゐるやう

に見える。

女性が其本性を否定し、男性の「友人」となり切らなくては眞の解放は實現せられない。女性解放の敵は「女性」そのものだからである。即ち、ワイニングルは母性を否定し、「生殖」に對して懷疑的態度を取り、人類は肉的存在を超越して靈的存在へ向つて努力精進す可きものだといふ説を唱へてゐる。

彼は飽迄女性を盲目的意志、原始的衝動の權化と見てゐるやうである。彼は明かにシヨールペンハウエルの説に影響せられて厭世主義に傾いてゐる。彼が若年で自殺したのは怪しむに足らない。

單純から複雑へ進み、更に大なる單純に歸るのを理想とする今の私の考へては所謂兩性分立説(Gonochorismus)の立場を取らざるを得ない。

## 六

等しく人間である限り、兩性は或程度迄身心兩方面に於て共通のものを有つ可き

であり、もし孰れかの性が人間性に於て缺くるところがあつたら極力之を補充す可きは勿論で、この意味に於て女性の向上進歩を圖るべきは當然であり、兩性の調和の上にも必要であるが、然も女性の男性化乃至中性化は決して吾々の理想ではない。

固より女性の中からも天才が輩出しうべきは歴史の證明するところであり、將來も可能であるが、この場合、かのグレルバルツェルの描いた「サツフォー」の悲劇の起る可きことを豫期しなければならぬ。「藝術家」として生く可きか「女性」として生くべきか、彼女は二つの内一つを擇ばなければならなかつた。

そして藝術の月桂冠を棄て、戀愛の薔薇の冠を戴かうとした彼女は終に戀に敗れて巖上から海中へ身を投じて仕舞ふ。二重の意味に於て「母」とならうとすることは一般の女性が望むべきことではない。

吾々は女性が男性の領分に入りこむ事に依つて漸次中性化してゆくよりも、兩性各其長處を發揮し相互に補充して「より善きもの」を生み出す方が正當の道だと考

へる。愛は完全慾であり、より善きものを生む努力であると見る私は、可及的純粋な兩性の典型からこそ、優良な第三者が生れ出づる筈だと信ずるのである。

然らば女性は常に其「單純」な本能的生活を營むべきであるか。決してさうではない。

私の所謂「大なる單純に歸る」ためには無數の「複雑」を通過しなければならぬ。「歸る」とは逆行を指すのでなくして、百尺竿頭一步を進める意である。女性は勿論單なる性慾的本能に止まる可きでなく、悟性、理性の方面に向つて努力發展し意志の修養をも怠らず、男性に接近し、精神的調和を圖る可きである。然らばニイチエの所謂「超人の母」となる理想を追求する事は出來ず、永久に奴隷の境遇に甘んじなければならぬ。

故に現代の女性が或程度まで男性化し中化性するは止むを得ない。それはまづ「人間」となる爲に通過すべき必然の過程プロセスとも云へる。その場合幾分「母性」を犠牲にす

べく餘儀なくせられることもあらう。これも「必然の禍」として忍ぶ可きである。

唯終局の理想は中性化ではない。女性は「人間」であり、そして特に「女性」であらねばならぬ。あらゆる複雑を通過し、包攝し、融合して、再び大なる單純に、自然に歸らねばならぬ。世界の文明に於ても純一から分化へ、爛熟から再び素朴へのリズムが絶えず波打つてゐる。

曾てはルソーの「自然へ歸れ」の叫びとなり、今やまた表現主義の宣傳となつてゐる。自然から全く背馳した文明は必ず滅亡する。人は常に母の懷ろて若返らなければならぬ。純粹な兩性の典型から初めて「超人」が生れ出づるであらう。

## 七

野に咲く花のやうに純真無垢なる淨瑠璃の女性を現代の女性は無自覺の女として嗤ふけれども、精進努力の結果再びかの天真爛漫に歸る事が出來てこそ眞に「女性」の完成と稱し得べきである。「黃銅時代」を以て寫實の極致を示した巨匠ロマンが寫

實の世界を突き抜けたところにバルザックの像が在る。「自然」は如何に零碎なものでもそれ自身完成してゐる。

一旦自然から離れた「人間」は努力して再び其完成に達しなければならぬ。自然の摸倣は決してこの目的を成就する所以ではない。必ず内面的精進に依らねばならぬ。「女性の覺醒」、「女性の解放」はこの意味に於て肯定せらる可きものである。

女性が人間としての修養を積む爲にも、又「女性」としての純眞を保つ爲にも兩性はもつと接近しなければならぬ。隔離する事に依つて純粹を保たうとするのは謬見である。多數の男性の中に極めて少數の女性を混入したときにのみ不自然な男性化が行はれるであらう。

兩性が自由に對等に交際する場合、性の純粹性は毀損せられることなしに、却て益々深めらる可きである。兩性が人爲的に隔離せられる場合に生ずる不自然の同性愛が其反證を提供する。監獄、兵營、病院、寄宿舎等の生活に依つて兩性の隔離を

永く強られる時には止み難き性的要求の結果同性内に異性の代償物を作り出して、「時を糊塗しようとする傾向が生ずる。内面的に性の純粹性を破壊することは是れより甚だしきはない。所謂「老嬢」の性格を見てもそれが分る。

之れに反し兩性自由に接觸する場合には各其長所を發揮する事に依つて圓滿な調和を得るのである。吾々は兩性が「友人」として「同僚」として家庭、社會に對立し提携することを希望する。其處から調和した柔かい心と、曇り無い若々しい笑とが生れ出るであらう。

現代生活は餘りに「無歡喜」である。餘りに「乾燥無味」である。それは、この兩性の調和が缺けてゐるからである。「音樂」はかういふ雰圍氣の中からは決して生れない。

「失はれたる笑」と「生れざる音樂」のために特に吾々は兩性の接近と調和とを求めねばならぬ。

ズーデルマンの新作劇

—

吾等は何なりしか

今は昔

平和の神優しく笑み、

同國同族の人々

仇敵となりし時……？

生の鬭争に糾紛れあひて

互に刃を交へ、

勤勞の磨臼の中に

友と友と相碎きし時……？

大小の黨閥

互に吞噬し、

屍を越ゆる歩みは既に

敵策と異らずなりし時……？

富豪は廢物に

數百萬金を投じて惜まず、

貧者を賑はさずして

争ひて古瓶を購ひしとき……？

利己は唯一の道にして

利己を説くものは豫言者となり、

これを難ずるは冒瀆にして

これに歸依するは祈禱たりし時……？

詩人の聖きよき眞理は

曇りて甘き雲霧となり、

藝術家は愚作に依りてのみ

名聲を得んと力めしとき……？

少女は路傍の人の囁きに

喜びて耳を藉し

姦通は晝食後の戯れの如く

無数に行はれしとき……？

……………

親愛なる友よ、吾等は何なりしか？

盲人めしひにあらずば何人も知らん。

されど過去をして過去たらしめ

寧ろ吾等は何なるかと問へ。

吾等は何なるか？ 曰く淨化せるものなり！

何人も騎士に叙せられたり！

祖國さしまね 塵ちりかば吾等は

喜びて艱苦に堪へ、死地に赴かん。

吾等の間に最早貧富の別あらず、

職業階級の差は一笑の料のみ、

吾等は力と質とに於て相等しく、

吾等はまた神を信ず。

吾等ば兄弟なり姉妹なり、

靈に於てはた肉に於て一體なり、

昨日きのふまでは媚めいび戯れしことありとも

今日は眼に於て心に於て潔し。

不和は霧散し

嫉妬と悪意は沈黙し、

ブーデルマンの新作劇

脈ごとに熱き血沸騰りて  
迸り出でんと欲せり。

吾等が唯一の願望は

わが存在と愛するものとを與へ捧げんとするに在り。

生きむ、生きむ……三たび生きむ、

三たび死せんがために。

……

かくして友よ、吾等が衣服たり

裝飾たりし贅物は落ちぬ、

友よ、これ奇蹟なり、

そは危険の生みしものなり。

永劫この事を記せよ！

汝等が子に語れよ、子の子に語り傳へよ！

吾等がありしものは廢滅したり……

吾等があるものよ、永遠に榮えあれ……

これはゾーデルマンの「神無き世」(Die entgötterte Welt)の巻頭に掲げられた詩であるが、之を讀めば本書の内容は略々想像することが出来る。本書は一九一六年二月の出版で三篇の戯曲が収めてある。即ち「女友達」(Die Freundin)「敷地」(Die gute Geschichtene Ecke)及「より高き生活」(Das höhere Leben)の三篇である。

これ等の戯曲の動作の場處は東方の城下や伯林及その附近などであるが、時は皆歐洲戦争開始の少し前になつてゐる。作者は今次の戦争を以て神を失つた世界と再び神を迎へた世界との分岐點と見てゐるのである。「過去の獨逸」と「現在の獨逸」とは云はゞ歐洲戦争が火蓋を切つた刹那に分れたのである。國家の興廢に關する「危険」が「奇蹟」を生んだ。惰眠を貪つてゐた獨逸人はバルカンの一隅に起つた銃聲に夢を破られて愕然として醒めたのである。ゾーデルマンは覺醒後の獨逸人を描かう

とはせずに回顧してその汚れた夢の痕を暴露しようとして企てた。これには然し理由がある。

若し醒めた現在の獨逸を描かうと試たならば今眼前に起りつゝある非常な事實に壓倒せられ、動々もすれば大火の前に線香花火を點じ、ピラミッドの前に砂塔を積み嗤を免かれない。今度のやうな大戰の間に在つて所謂戰爭文學を作らうとするのは非常な危険を冒すものと云はなければならぬ。事實が詩よりも遙に偉大だからである。また一方から云へば、さういふ企てをするには餘りに作者の頭が興奮してゐる。ゾーデルマンが醒めた獨逸人の犠牲的精神の發現を描かうとせずに、寧ろ過去の汚點を指摘して將來を戒めようとしたのは當を得てゐると云はねばならない。同時にこれ等の戯曲が所謂傾向劇に屬することも否認することが出来ない。ゾーデルマンは由來道德家である。彼の作にはよくモラリジレンした痕が見える。この三篇の如きは殊にそれが著し。

## 二

「女友達」は四幕の間劇 (Schauspiel) でイブセンの「野鴨」の中に出て来るグレーゲルスといふ世話焼が所謂「理想的要求」でヤルマー一家の幸福を再建しようとして、却て悲劇的結果を生むやうに、或解放せられた女性がその友なる若い未亡人の家庭に入り込んで蠱惑的態度と言辭とで戀愛の自由を説き、貞淑な未亡人を唆かして終に墮落させ、愛兒を残して家出させるといふ筋で、そのために潔白な熱し易い若い家庭教師は自殺し、九歳の少年は孤兒になつてしまふ。この蛇のやうな女は友が亡夫と結婚したのは他の男に對する面當半分 (Par. Teil) からて眞の愛情は無かつたといふ事實を探り出して、その虚に乗じ、古い愛に油を注ぎ、新らしい戀を煽り立て、終に身を焼く燄とするのである。「虚偽の結婚」を破壊しようとする點は「野鴨」と同様であるが、この女は更に進んで無道德、無宗教を標榜し、強烈な自我主義を奉じてゐる。



「人類とは何です？ 妾にとつてこれほど如何でも好いものはありません。強い獣や弱い獣の寄り集りて、火で焼いたり刃物で切つたら妾と同じ様に痛がる位が共通の點です。規準も何も要つたものぢや無い。自分で勝手に歩いて消えて無くなるでせう。」

「そして貴女も一緒に連れて行きますよ。」

「連れて行かれはしません。妾は眞先に飛び込みます。」

「何ですつて、それが終局なのですか。」

「いゝえ、始めなんです。神無き世の始めなんです。」

「まあ、まあお静に！ 第一にまだ自然といふものがあります、これが神の玉座を占めるべきでせう。」

「人類とは何ですと問ひましたが、今度は自然とは何ですと訊ねませう。殘酷な凡ての物を喰ひ盡してしまふ怪物です、その齒を逃がれるために神といふものが發明されたのです。自然に仕へるのは草食動物に成り下るので、自然に反抗するのが文明です、勝利です。人間であるといふ事は自然に逆らふといふ事です。」

この破壊的な自我主義に對して老牧師と中年の醫師とが闘ふが、結局前記のやうな犠牲を出してしまふ。醫師は嘆息してかう云ふ、

「……吾々の共同の敵は個人の自己崇拜です、絶對的になつた自我です、神の掟、人の掟、恐らくは

また自然の掟さへ顛覆しようといふ奴です。規範から離れるといふことは今までもありましたらうが、今度のやうな仕事は現代の狂暴な奢侈——物質的及精神的の奢侈が無くては出来ない藝です。」

秩序を破壊し、道德、宗教の土臺を掘り崩し、弱い犠牲の流す血を見て喜ぶといふことが、かういふ女にとつては必要な精神的奢侈となつてゐるのである。阿片を喫し、モヒを注射し、強烈な酒に酔ふのと同じ様に缺く可らざる刺戟となつてゐるのである。

九歳の少年は「母を奪はうと附け覗ふ肉食獸に對する子猫の本能的の恐怖」でこの危険な女を憎み恐れてゐたが、果して母はその毒牙に罹り、彼を愛し、彼の母に純な憧憬を懷いてゐた忠實な家庭教師は自殺してしまふ。靈と肉との救済者として牧師と醫師とは協力してこの取り残された若き生命を育て上げようと約すのである。爛熟し、腐敗しかけた過去の社會を呪つて、覺醒した現在を讚美し、春秋に富める若い獨逸を祝福する作者の心は明かである。

藝術品としては餘り成功したものと思へない。個々の人物が型に嵌り過ぎてゐて、中心人物なる「女友達」も深味と凄味を缺いてゐる。到底「ロスマルスホルム」のレベツカの比で無い。氣の弱い女主人公の墮落の経路もモチヰールングが十分で無かつた。

## 三

「敷地」は五幕の悲喜劇(Tragikomödie)で、直譯すれば「恰好の良一隅」といふ位の意味である。市立劇場の敷地問題が中心となつてゐて、貪慾な猶太人が劇場の敷地として最も便利の好い地所を所有してゐるところから出版業者で市會議員になつてゐる男が主唱してそれを市で買収させようとする。それにはまた反對派があつて種々な葛藤が起る。結局その敷地へは劇場の代りに「闘牛場」が建てられる。牛の代りに妖艶な女の居る闘牛場が建てられる。これが悲喜劇の終局である。けれども敷地問題そのものは中心思想には餘り關係が無い。作者の描かうとしたのは現代の

熟過した藝術至上主義、糜爛した趣味生活の破産である。

「御覽なさい、吾々は藝術的才能が云はゞ流行病のやうになつた時代に住んでゐるんです。どの家庭にも天才が一人位居て畫を描いたり、朗讀したり、脚本を書いたりしてゐます。」

出版業兼市會議員の家庭が恰もそれで娘は繪畫の天才があるものと思ひこみ、婿は所謂エステートで極端な享樂主義を代表し、只管強烈な刺戟を追求して、世間的の道徳は全然眼中に無いと公言してゐる。そして現在自分の妻の従妹を唆かして關係をつける。この若い美しい従妹は實際舞踊に相當の才能を有つてゐるのであるが、虚榮に驅られ、喝采に酔つて、名聲の爲めに自分の貞操を犠牲にしてしまふ。比較的健全な長男さへも戯曲家として立たうと志し、廉直な好紳士なる父の議員も多少子女の藝術主義にかぶれた氣味で、熱心に市立國民劇場の建設に盡力するのも、家庭の空氣が大に影響してゐるやうに思はれる。それが爲めに反對派から疑はれて、彼が劇場のために奔走するのは自分の勢力を濫用して長男を新劇場の監督に上げ、

その脚本を上場させる魂膽だと新聞へ書かれる。これは冤罪であるが、彼にとつて確かに大打撃であつた。彼は衷心から自分の藝術的運動の空虚であつたことに氣が附いて斷然議員の職を辭してしまふ。一方に若き妻なる家附の娘は自作展覽會が散々の不評に終つて失意のどん底に落ち込み、一室に閉ぢ籠つて茫然一方を凝視してゐる。長男は窃かに熱愛してゐた従妹を放埒な義弟に奪はれて、文壇に於ける多少の成功も眞の才能を缺く者にとつては結局藝を鬻ぐ舞妓の名聲に等しく、如何なる愚民も自分の主人となり、場合に依ては處刑者となり得るのだといふことを悟る。美しい従妹だけはともかく藝術の上に成功して一座の明星と謳はれ米國へまで招聘されるが、そのために彼女は女としての生命を犠牲にしてしまつた。昔の戀人なる従兄は悔恨の涙に咽ぶ彼女を撫て擦りながらかう云ふ――

「噫、私達二人は幸福になれた身の上だつたのだ！……そんな眼つきで見て呉れるな！……私達は互にもう與へるものを持つてゐない……たかだか一緒に泣くことが出来る位のものだ。」

「あなた、今夜お目にかゝるのがもう最後よ……彼地へ渡れば――最早妾一生歸つちや來ません。」

かうして藝術の誇りに輝いてゐた議員の一家は忽ち失意絶望の闇に埋もれてしまふ。こゝへ二十五六歳の優しい、質素な風をした女性が現はれて、自分を「死んだ人間」と呼ぶ主人公を始め沈鬱に陥つた家族の者の心の痛手を癒すべく忠實に立働く。笑を失つた人々の間に在つてこの女一人が晴やかな温かい笑を有つてゐる。この女の静かな慎ましい足どりの下に春の草が芽ぐむかと思はれる。この女の柔かな白い手に介抱せられて不眠に苦む主人公も終に安眠を得た。この女は今迄議員の家へ出入することを憚つてゐた身の上なのである。

「まあ御覽なさい！ お眠みなさいましたよ！」

奇蹟でも見るやうに驚喜する彼女に對して長男は心からの感謝を表すると、女は驚いてそれを拒む。

「貴女がさうして萬事御世話をして下さるのを見ると、女といふものが本來何の爲めに生れてきたか

といふことが解つたやうな気がします……お休みなさい！」

かう云つて長男が寢室の方へ行きかけると同時に幕が下りるのである。

ゾーデルマンがこの戯曲で描かうとしてゐることは既にモリエールが「青鞥」(Les femmes savantes)や、「氣取りや」(Precieuses ridicules)などで十分に書いてゐる。女子の領分が家庭に在ることを暗示した點も全く同一である。唯、ゾーデルマンは現代作家として環境の描寫に於て精細を極めてゐる。即、敷地問題を中心とし藝術界の素人や黒人を前面に置き、その背後にこれ等の人物を操る商賣人の生活を描いてゐる。かういふ輩は藝術家を喰物にしてゐる云はゞ藝術界の寄生蟲であるが、一面に於てその黒幕として大勢力を有つてゐる。凡てこれ等の人物——素人、女優、記者、金貸、美術商、書肆、議員等を國民劇場建設事業の周圍に蝟集せしめ、目まぐるしい活動をさせつゝ相當に個々の人物の性格を書き分けた手腕は流石に老巧と云はなければならぬ。然し、さういふ生活に通じない私にとつては矢張第五幕がしんみ

りして好いと思つた。藝術至上主義の夢が醒めた敗殘者の寂しい心もちを描いたところが深い感興を牽いた。そこには近年頻りに文壇の道に蹉跎する作者の憤懣と一種の悔恨との聲を聞くやうに思はれる。それは兎に角、この劇に出て来るやうな客間の天才は飾窓の寶石や指環などと一緒に戦後の歐羅巴には當分影を潜めることであらう。

## 四

「より高き生活」は四幕の喜劇である。「より高き」とは無論アイロニカルに用ゐられてゐる。

一言にして云へばこの戯曲は女子の無貞操を暴露し、同時にそれ等の無耻の女の纖手に操られる男子の愚を笑つたものである。一方から見ると男と女との性的闘争とも云へる。現に女主人公がかう云つてゐる——

「貴郎は先刻妾をより高き生活の布教者だと云ひましたね。この妾をね。さう云ふ意味はよく分つて

ゾーデルマンの新作劇

おますよ。その通り妾は布教者なんですの——けれども、妾のなんですよその生活といふのは。妾のより高い生活をする爲に擇む男といふものは——さうさ、男達と云つた方が好いでせうね——助平根性のお前さん方は一朶にしなれば御用にや立たないんだからね……さういふ男達は精々妾共が自分といふものを意識するのに必要な刺戟となるために生きてるやうなもんさ。それから時々は妾共の精神的、それから——肉體的緊張の避雷針の役を勤めるのさ——それから、一番肝心な事は——妾共が經濟上の獨立をえない間は……こんな事を云つて、もし御氣に障つたら御免なさいよ、妾共は幾千年の間、男の玩具になつて來たんですからね——奪られたり、欺されたり、棄てられたりどんな鈍漢でも意氣地無しでも御意次第にさ。そこで今妾共の中でお前さん方に復讐をしてやらうといふものが出て來たわけさ。今度は女の方で奪つたり、欺したり、棄てたりしてやるのだ——慾徳づくや、面白づくでね。」

これが悲しさうな柔い青い眼を持つた可憐な細君として建築技師なる好人物の良人に仕へて蟲も殺さないやうな顔をしてゐた女の棄臺詞なのだから驚く。この女が入り込んだ爲に兄弟のやうにして來た二人の建築技師と一人の畫家との三人同盟が破れて種々の不快な葛藤が起る。女は良人の友に不絶誘惑の眼を向けてゐるから

ある。この外この女に關係した者の中には氣障男の標本とも云ふべき胡弓彈手がゐる。胃加答兒と意志薄弱と健忘症とを藝術家の看板と心得、昔トビアス・グアルネリウスが母の魂を封じ込めた最愛の胡弓を貧苦に迫つて旅人に譲り渡し、後いたく悔いてその樂器を探しながら世界を流浪したといふ傳説のやうに、自分も失はれた母の魂とても名づけたいやうなもの、昔聞いた樂の音といつたやうなもの、一種のより高き生活を求めてゐると自稱する男である。そしてそのより高き生活とは「女」を指してゐるのである。この優男のために技師の細君とその舊馴染の新らしい女と海千山千の悪婆摺とが攪合ひの喧嘩を始めるところがこの喜劇の頂點になつてゐる。そしてこれ等の惡辣な女や氣障男などを向ふへ廻はして得意な機智と辯舌とで眼ざましく戦ひ、昔から喜劇の定型となつてゐる「道化役」とか「馬鹿」とかの役を勤めるのは技師の友人たる畫家で、この男と技師の細君とが戯曲の中心人物となつてゐる。そしてこの女性の心理に通じ切り、極めて犀利な觀察眼を有つてゐると自分

も信じ、人も認めてゐる男が、例の新らしい女に出逢つて、相手を醜弄してゐるつもりが女に裏を掻かれて何時かその掌中に丸め込まれ、危く「より高い生活」の住民とならうとするのがこの戯曲の最も鋭いアイロニーである。

作者がいつもするやうに茲にも放縱な女性に對して一つの對照コントラストが置かれてゐる。それは技師の妹で、やゝ盛りを過ぎた靜かな、謙遜な女性として描かれてゐる。戯曲の終局は三人がそれぞれ迷から覺めて昔のやうな親密の仲に歸り、新たに「より低い生活」を始めようといふので結んである。も一人の獨身の技師は友人の妹の方に眼を注ぎながら、いやそれこそ却つて「より高い生活」なのだと言ふ。

作者の傾向は説明を要しない。この戯曲に於ても吾々の興味を牽くのはその中心思想では無くして、所謂解放せられた女連の墮落した生活の描寫である。例の悪婆あはば摺すりが雜貨塵ちりの女將となりすましてゐて、贅澤な流行品や、怪しげな藥品などを賣り、また巧妙な裝置しかけで店を男女の密會所や白粉の女が男を誘惑する秘密な場處に當て、

ゐる模様などは作者の最も得意な表現であらう。要するにデイトーイルズの描寫に於ては可なり成功してゐるが、喜劇とは云ひ條人物が餘り定型的で且誇張せられ、却て効果を弱めてゐる。

總括して云へば「女友達」は信仰問題、「敷地」は藝術問題、「より高き生活」は貞操問題を取扱ひ、戦前に於て如何にその各方面に互つて獨逸の社會、殊に大都會の生活が腐敗してゐたかを示さうとしたものである。しかも吾々はズーデルマンの所謂「ありし獨逸」と「ある獨逸」との轉化が奇蹟的であつて、それは危険が生んだのだといふばかりでは満足することが出來ない。若し利己主義、享樂主義が跋扈して、神が失はれてしまつたとすれば、それが如何してこの戦争の勃發と共に突然歸つて來たのであらう、それが知りたい。無から有は生じない。神を失つた民衆の中に神を求める聲が起りつゝあつたのでなければ利己から犠牲、人の轉化は解しがたし。この間の消息も劇中に多少暗示せられてゐないでも無いが不十分である。一體

「神無き世」を書くのは時代遅れの感がある。それは今迄にもう厭きる程描かれてゐる。それよりも「神を求むる世」を書いた方が適切だつたのではあるまいか。

最後にズーデルマンの諷刺の筆はオットー・エルンストと同じ位の水準に在つて、深刻味が不足してゐるといふことを附け加へておきたい。

## 最近獨逸文學の趨勢

### 一 表現主義

ゲエテの世界からビスマルクの世界へ向つた獨逸文化は破産した。そして今や再びビスマルクからゲエテへの復歸を示してゐる。理想主義の流れは軍國主義の底を貫いて流れてゐた。戦前にも戦争中にも流れてゐた。それは獨逸人の情意ゲミューテに深く根ざす浪漫的思想の泉から湧き出る永遠の流れである。それは絶えず河底を變へ、或は潺湲と或は滔々と或は澎湃と流れる。シユツルム・ウント・ドラング派から浪漫派輓近派を経て今や第四の醜醉期が始まりつゝある。世界大戰は歐洲文化に對する血と火の洗禮であつた。猛烈な淨罪火であつた。世界は今創痍に呻いてゐる。そして

新生に憧がれてゐる。古い神は死んだ。新しい神は何時現はれるであらうか。目下新獨逸文壇の中心となつてゐるのは所謂表現主義(Expressionismus)である。一言にして云へば印象主義(Impressionismus)の反對で外界の勢力に驅使せられた自我を解放し主張しようとする運動である。之に關する著書も數多くあるが、私はまだ一々それを讀む機會を持たない。次に誌すのは近着の雑誌や一二の文學史に依る極めて粗雑な報告に過ぎない。まづ、かういふ新運動には無くてはならぬヘルマン・パアルの話を紹介しよう。彼は如何にも表現派らしい簡勁な文章で、其主義綱要を説いてゐる。それに従へば、現代人は外界の壓迫の爲に自我を失ひつゝある。表現派の運動は人間が自我を取り戻さうとするのである。人類は自分の作り出したものゝ奴隷になりつゝある。靈魂と機械との争闘が行はれねばならぬ。自然を征服しようとして人は自然の復讐の爲に斃れた。

人生は自由と歡喜とを失つて仕舞つた。魂を與へよと人類は叫びつゝある。時代は絶叫しつゝある。藝術も亦之に和して魂を求めに出かけなければならぬ。表現主義の起る所以は此處に在る。印象主義の世界に於ては人類は唯「耳」ばかりの生物になつた。表現主義は人類の「口」を開き、靈性の答を與へようとするのである。かういふ主張の下に生れた表現派の運動は其性質上まづ造形美術の方面に現はれた。マックス・オスポルンの説く處に依れば獨逸に於てはまづドレーズデンに「橋の會」なる一派が起つた。新しき國への橋といふ意味であらう。マックス・ベツヒンタインの如きは其代表者である。この畫家はかのポール・ゴガンの響に倣つて南海の孤島に移つて強烈な日光に浴し熾烈な色の世界に住み、自由な素朴な土人の原始的生活を研究した。現代の文明に背反して、生活を還元しようといふのである。ライン地方にも「萊茵獨立結社」なるものが生れてセザンヌ、ヴァン・ゴッホ等を宗として新旗幟を建てた。次で藝術の都ミュンヒェンに於ても動物畫家マルク等が出て、立體派、未來派の傾向を襲ひ、彫刻の方面ではロダンに私淑して、更にロダン以上



に出ようと努めた。要するに既に戦争以前に佛蘭西や伊太利に起つた新しい藝術運動に共鳴する藝術家が大戰の刺戟に依つて積極的に運動を起こし、一般藝術活動乃至文化運動として、理論的にも宣傳を試みるやうになつたのである。日本に於ける「自由畫」の唱道の如きも同じ道を進むものと見る事が出来る。そして、其要點は對象の克服と形式の單純化とに在ると思ふ。印象派は餘りに對象に即し、其奴隸となつて、自我を失つて仕舞つた。表現派は自我を外界に投射し、對象を假りて自我を表現しようとする。對象の中に魂を求めなくてはなくて、自己の魂を以て對象を生かすのである。従つて寫實的印象主義者が飽迄忠實に自然を模寫したのに對して表現派は不要な細部ディテールズの描寫を棄て去つて直ちに其核心を端的に表現しようとする。云はゞ線と色との還元である。云はゞ萬象發生の起源に溯つて其創造の神秘に與らうとするのである。自己の中から新に自然を生み出さうとするのである。非常にアムピシヤスな企てと云はねばならない。表現派の畫家が例へば「牛」を描く場合に、彼

は「原牛ウルリシ」とも云ふ可き不思議な物を描いてゐる。それは彼が懐く牛の心象ビルドに外ならない。人間を描く時にも好んで「原人」を描かうとする。この點から見れば表現主義は藝術の還元主義である。そして官能的の色の世界から、一層精神的、惻愴シヤム的の線の世界へ移らうとしてゐる。即ち繪畫は彫刻又は建築に接近して來て多くの畫家は各自己の空間的世界を形づくらうと努力してゐる。色は對象に即し易い。線は一層自我的である。色と線との對立はオスボルンの説に依れば拉丁民族と目耳曼民族との對立である。そして、それはセザンヌとゴッホとに依つて代表せられる。セザンヌに於ては凡てが水晶の様に玲瓏たる精神的調和から流れ出る。ゴッホに於ては凡てが彼の大調和を永久に求めて得ざる熾き盡すやうな痛ましい憧憬に基いてゐる。彼の線は絶倫の力を以て自己の空間像ラウスケルトを築き上げ、一種獨特の象徴的の言葉を語つてゐる。佛蘭西人なるセザンヌは彼の表象を飽迄官能的要素なる「色」の中へ浸した。之に反して目耳曼人なるゴッホはより精神的要素なる「線」に據つてゐる。

この點からすれば表現派の繪畫は東洋畫の精神に近づいて來たものと見る事が出来る。そして印象主義が漸次表現主義に變つて來た徑路を痕づける事も出来ると思ふ。要するに兩つの主義はその出發點を異にしてはゐても、其極致に於ては相一致するものと考へられる。「黃銅時代」のロダンと「バルザック」時代のロダンを取つて考へても其邊の消息が解るであらう。

さて、この造形美術に於ける表現主義が如何なる形を取つて文藝の方面に現はれたか。言葉は繪畫彫刻の様に容易に又顯著に形式の革命を許さない。只茲でも眼に附くのは色より線への推移である。對象の克復と形式の單純化である。表現派の詩人ドイブレルの説に依ると、迅速と、自發性と對象の內的構成の周圍への最高の緊張とが文體シュテイルの條件である。文體そのものが觀念イデーの表現である。一の幻影ヴァイゾレが最後の簡潔さを以て、極度の單純化の範圍内に於て、自己を啓示するものが文章上の表現主義である。俗間の説に絞首臺上の人最後の瞬間に彼の全生涯を再び體驗すると云

ふが、これは表現主義にして始めて可能である。名稱の無い色、説明の無い線、附加語が無くて一定の旋律に置かれた名詞、これが表現主義の文體シュテイルである。凡ての體驗の絶頂は精神的のものになる。凡ての現象は同時に其定型である。吾々の創作は自我性を帯びなくてはならぬ。遠近法的ペルスペクティブに展開せられずに、自我の内部から結晶して出なければならぬ。世界の中心點は各の「自我」の中に在る。自我に合ふ「作物」の中にさへそれが在る。——即ちシュトルクの云ふ様に「凡ての現象界はそれ自身藝術に取つて無價値である。藝術は自己の感情を表現するが爲に之を用ゐるに過ぎぬ。」といふのが表現主義の綱要だと云へる。そして其自我の世界を表現するには飽迄簡勁な、急逼した、旋律的な文體シュテイルを用ゐる。點體ポテンチリスト派の筆致を思はせるやうな電文體デプシエンシュテイルとても云ひたい様な文章が出来る。實際この派の人の書いたものは論文でも詩でも恐ろしく難解である。新造語は無盡藏に出て來るし、極度まで張り詰めた文章は息苦しく感ぜられる位である。箴言體オラケルとても名づけようか、時時神託オラケルの様に謎語の様に

不可解である。立體派、未來派の繪畫に對する時と同様の感じを興へられるのもある。「觀念のローマンス」と題したレオ・マツチャス（ヴェデキンドの後繼者と云はれてゐる）の文章を抜萃して見よう。

「バアナアド・シヨ一のピグマリオン。大詰の最後の場面——彼が彼女に手袋を頼む。彼女は彼の鼻の先ではたと扉を閉める。舞臺空虚。突然扉が開く。彼女が、手袋は何號？と訊く。笑ひながら彼が云ふ、八號——幕。この場面が忘れられない。何故だらう？不眠。」

「ハインリヒ・マンの小さき市。最後の場面——人氣の無い市場。死んだ男女。老人が来る。二人を見て、脱帽して、人の悪い微笑を洩らして指を唇に當てる。この場面が忘れられない。」

これ等は勿論難解ではないが、手帳の端に書き附けたやうな覺え書風のものに物々しい表題を附けてゐるのが面白い。日本には從來かういふ短評式のものゝ澤山あつた。この點で日本の批評家は表現主義者の先驅をなしてゐるのであらうか。要するに詩でも評論でも「思想の壓縮」といふことが行はれてゐる。（クラーブンドは一時間の獨逸文學史といふ本を書いてゐる。）殊に「争闘」を中心とするやうに考へられて

ゐる戯曲の方面に於てこの表現主義を生かさうと努力する若い作家が多く現はれて來た。表現派の作家は大概三十代の青年で猶太系統の者が多いとの事であり、また往々性慾問題を取扱ふ者があるので春機發動期の昂奮と戦争の恐怖とが生んだ一の變態的現象だと冷評する人もあるけれども、兎も角新しい神を求めようとする努力は之を認めることが出来る。單に體驗の空虚を糊塗するために擇ばれた表現法だとして葬り去ることは出来ない。表現主義の運動は最早文學史上の事件になつてゐる。戦争と革命とが獨逸國民の情意を非常に深刻化したことは何人も否定し得ない事實である。之を表現すべき新藝術が生れ出づ可きは當然である。表現主義の批評としては「自然に對する獨逸人固有の畏敬の念を缺き現象の眞實に對する獨逸的の誠意を失ひ、藝術的創造の凡ての外的意欲からの「自由」とその「内的必然性」とを缺いてゐる」といふシュトルクの言葉が妥當であるやうに思はれる。更にヘルマン・バルがゲエテの藝術論を引いて表現主義の得失を論じたのは大に吾人の意を得たもので

ある。ゲエチに従へば主観オブジェクトに在る凡ては客観オブジェクトに在つて、更により以上の物が存在する。客観に在る凡ては主観に在つて、更により以上の物が存在する。印象主義者は客観の「より以上」を示して、主観の「より以上」を隠してゐる。表現主義者は唯主観の「より以上」のみを知つて、客観の「より以上」を見ない。吾人は兩つの世界から生れる。吾人の「眼」もさうである。眼の中には外界が映ずると同時に内部から「人間」が映ずる。内外兩界の總體は「眼」に依つて完成せられる。靈眼と肉眼の間斷無き生きた結合が藝術にも科學にも、生活にも必要である。耳は啞である。口は聾である。然し、眼は聴き且語る。——表現主義者は人類の口を開かうとするが、耳を掩うて語るものである。口ばかりの藝術である。耳ばかりの印象主義者に對して他の極端に走るものである。彼等が「眼」の世界へ歸つて來るときに始めて表現主義の藝術は完成するであらう。

## 二 駄 駄 主 義

ダダイスムス (Dadaismus) に就ては一層私の知識は貧しい。其定義すらも知らなす。然し、目下巴里あたりでは大に人氣を博してゐるやうに見える。この派に屬するリヒアルド・ヒュルゼンベツキ氏の説に従ふと、この運動は一九一六年に、フリー・バル (Ball) エン・ニ・ニヒス (Hennigs) 等が瑞西チューリヒ市の或薄暗い路次の "Cabaret Voltaire" といふ酒場に集まつて詩の朗讀や舞踏などをしながら大に藝術論を闘はした際に形づくられたものである。それは戦争の爲めに諸方から流れ込んだ藝術家の群であつたのであらう。獨人、露人、羅馬尼人などが居た。獨逸の畫家アルツは巴里から來てピカツツ、ブレーク等の藝術論を紹介した。立體派やカンヂンスキイなどの思想に負ふところが多いやうに見える。駄駄主義者は人間の最後の幻影イリュージョンを筆筒に藏つて、生命がけて文明の原始林ウルワルトを馳け戻り、新しい、そし